

県道木次直江停車場線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
小野遺跡

2005年

島根県 斐川町教育委員会

県道木次直江停車場線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

小野遺跡



島根県斐川町の位置

2005年

ひ かわ ちょう
斐川町教育委員会

序

島根県東部の宍道湖西岸に所在いたします斐川町では、島根県の玄関口ともなる出雲空港を抱えております。また近年、斐川町南部丘陵地帯を横断する山陰高速自動車道の建設工事も進行中で斐川インターチェンジの開通も控えています。

この交通便利な立地を生かし、町東部ではゴルフ場、道の駅、いりすの丘などの観光施設、西部では企業誘致に伴う工業団地の造成や流通の効率化を図るための道路の新設・改良などの開発が急激に進んでおります。

しかしその一方でこれらの開発は私たちの先人が残された貴重な文化財の破壊という危機をはらんでいます。私たちは、これらの文化財を守り、後世に伝えていく責務も負っています。

小野遺跡が所在する谷一帯は、古代における政治の要衝地であり、本遺跡より500メートル西にある後谷V遺跡は、出雲国出雲郡正倉跡として注目されています。本遺跡は県道木次直江停車場線の工事に伴い、出雲郡家閨連遺跡群発掘調査として平成2年より調査が継続して行われております。今回は、国道9号線から山陰高速自動車道斐川インターチェンジへ通じる道路整備事業に伴い調査が行われました。これによって、これまでの調査で検出されました大型建物群の範囲が限られ、律令期における郡家閨連施設の解明に役立つ資料となりました。

本書が多く人の手に渡り、研究の一助となりますとともに、広く埋蔵文化財に対する关心と理解を高める資料となりますことを期待するものであります。

最後になりましたが、調査および遺跡の保護にあたりご協力いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成17（2005）年3月

斐川町教育委員会

教育長 古川君和

例　言

1. 本書は斐川町教育委員会を調査主体として実施された鳥根県簸川郡斐川町小野遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査期間

○発掘調査

平成14年度（2002年）1月9日～3月26日

平成15年度（2003年）4月3日～6月17日

○報告書作成

平成16年度（2004年）11月1日～3月31日

3. 調査組織（職名等は当該年度のもの）

○平成14・15年度（発掘調査）

事　務　局　陰山昇（斐川町教育委員会文化財課長）、宍道年弘（同課係長）、

原賢二（同課主事）、佐々木歩美（同課主事）

調　査　員　江角健（斐川町教育委員会文化財課主事）

調査補助員　大山晴美（斐川町教育委員会文化財課）

作　業　員　青木知子、青木道夫、小豆沢敏子、陰山百合子、陰山律雄、勝代勇、
多々納孝夫、長谷川房夫、樋野忠、樋野康江、矢野文一、矢野政子、
伊藤良司、中村裕之

内　　業　高木和子、遠藤愛望、江角美恵子

○平成16年度（報告書作成）

事　務　局　陰山昇（斐川町教育委員会文化財課長）、宍道年弘（同課係長）、

原賢二（同課副主任）、佐々木歩美（同課副主任）

調　査　員　江角健（斐川町教育委員会文化財課副主任）、

露梨靖子（同課臨時職員）

4. 自然科学的分野の分析・検討を渡辺正巳氏（文化財調査コンサルタント株式会社）に依頼し、玉稿を賜った。

5. 本書の刊行にあたり、次の方々にご協力をいただいた（順不同、敬称略）

田中義昭、佐藤信、池田敏雄、三原一将、原田敏照、伊藤徳広、林健亮、澤田正明、石原聰、宍道年弘、陰山真樹、阿部賢治

6. 本書の執筆は江角の監修の下に露梨が行った。遺物実測は阿部、遠藤、江角美、江角健、宍道、露梨、陶磁器の実測・観察は阿部、トレースは露梨が行った。

7. 遺構・遺物写真は江角が撮影した。

8. 採図中に示した北方位は座標北を示す。

9. 出土遺物・図面・写真類は斐川町教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りし、金属器と石器は断面に斜線を入れ、それ以外は白抜きをして区別した。土師器の丹塗製品については丹塗の範囲を網掛けで表現し、底面部分の丹塗の有無は記号化し、網掛けと白抜きで示した。それ以外のものについては各々本文中に触れている。
2. 本文中・図版中・写真図版中の遺物番号は一致する。
3. 本簡に関して、本書観察表は『木簡研究』(木簡学会編)の記載様式に準ずる。本報告に用いた符号は以下のとおり。

<本文に用いる符号>

- 「　　」 木簡の上端ならびに下端が原型をとどめていることを示す。(端とは木目方向の上下両端をいう)
 - <　　> 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。
 - 穿孔のあることを示す。
 - × 前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。
 - (　　) 校訂註および説明註。
4. 本書で用いた分類(用語含む)および編年觀を依拠した文献は第5章の末項に一括して掲載している。

目 次

序

例言

凡例

目次

表目次・挿図目次・写真図版目次

1. 調査にいたる経緯と経過	1
2. 位置と環境	2
第1節 地理的環境 第2節 歴史的環境	
3. 調査の概要	4
調査の目的 調査の期間 調査区の概要 基本層序 調査終了時の遺跡の保護	
4. 遺物について	8
第1節 概要 第2節 出土遺物について	
5. 小野遺跡発掘調査にかかる自然科学分析	18
6. まとめ	23
観察表	24
写真図版	32

表 目 次

第1表 平瓦分類表	9
第2表 丸瓦分類表	9
第3表 ^{14}C 年代測定結果	22
第4表 瓦観察表	24
第5表 木簡観察表	24
第6表 鉄器観察表	25
第7表 石製品観察表	25
第8表 銭貨観察表	25
第9表 須恵器観察表	25
第10表 土師器観察表	28
第11表 陶磁器観察表	31
第12表 土製品観察表	31

挿図目次

巻頭挿図 島根県斐川町の位置

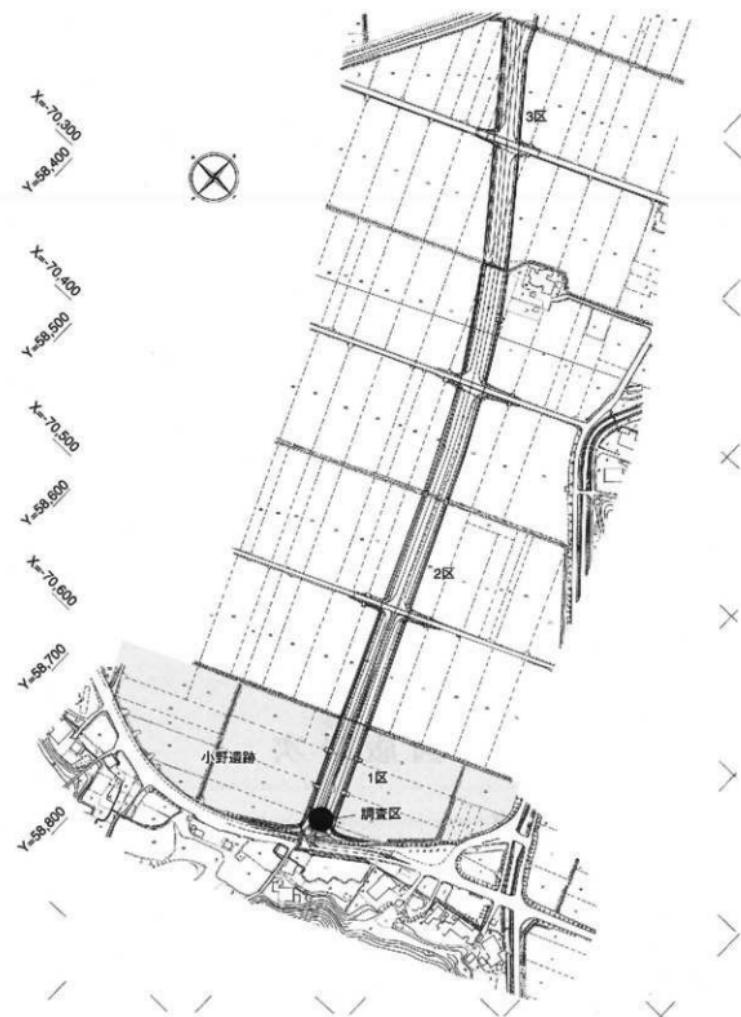
冒頭挿図 県道木次直江停車場線神水工区と小野遺跡

第1図 小野遺跡における過去の調査区	1
第2図 後谷遺跡・小野遺跡と周辺の遺跡	3
第3図 トレンチ配置図ならびに基本層序図	5
第4図 調査区周辺の地盤	6
第5図 遺物実測図 瓦（軒丸）	8
第6図 遺物実測図 瓦（鷲尾、平瓦）	10
第7図 遺物実測図 木簡・鉄器・石器・錢貨	11
第8図 遺物実測図 須恵器	12
第9図 遺物実測図 須恵器	13
第10図 遺物実測図 弥生土器・土師器	14
第11図 遺物実測図 陶磁器	15
第12図 遺物実測図 土師器（平安時代以降）・土製品	16
第13図 資料採取地点（第3トレンチ）	19
第14図 No 1 地点の花粉ダイアグラム	20
第15図 第3トレンチのプラント・オパールダイアグラム	20

写真図版目次

写真図版 1 第2トレンチ石組み遺構	7
写真図版 2 瓦（軒丸・鷲尾・平瓦）	33
写真図版 3 線刻瓦・木簡	34
写真図版 4 鉄器・石器・錢貨・須恵器（坏蓋、坏身）	35
写真図版 5 須恵器（ヘラ記号、墨痕、高坏）	36
写真図版 6 須恵器（壺、甕）、土師器	37
写真図版 7 陶磁器・土師質上器	38
写真図版 8 陶磁器・石未製品、鉄滓、桃の種	39

冒頭挿図



県道木次直江停車場線神氷工区と小野遺跡

1. 調査に至る経緯と経過

小野遺跡は、山陰高速自動車道斐川インター チェンジに国道9号線から接続する道路整備事業のひとつとして、県道本次直江停車場線緊急地方道路整備事業が計画された平成2年度には既に周知の遺跡であった。斐川町教育委員会は県出雲土木建築事務所と協議の上、平成2・3年度に現地踏査を行い、事業地内に6つの遺跡が全域にわたって存在していることを確認した。同時に設定された36ヶ所のグリッドからは本遺跡・後谷V遺跡・稻城遺跡から多量の土器が出土し、特に後谷V遺跡からは礎石列と炭化米が検出されたことが注目された。その後平成4～7年度にかけて国・県の補助金を受けて実施された調査で、後谷V遺跡が「出雲國風土記」に記されている出雲郡家の正倉跡である可能性が極めて高いことが判明した。町教育委員会は文化庁・県教育委員会と協議して、遺跡の全容をつかむために周辺の民有地を含めた本格的な範囲確認調査を補助事業として実施することとした。

本遺跡では、平成5年度の調査で掘立柱建物群・硯・墨書き土器・土馬・瓦等が確認され、公的施設か在地有力者の居宅の可能性が示された。平成9年度の調査でも同様の結果を得た。

以上の経過を踏まえて平成13年1月17日に島根県出雲土木建築事務所より県道本次直江停車場線神水工区道路改良工事予定地内の文化財分布調査の依頼書が提出された。これを受け斐川町教育委員会が踏査を行った結果、1区(小野遺跡)・3区(神守I遺跡)は本調査、2区については試掘調査の必要性が確認された^①。これを受けて平成14年9月30日に島根県出雲土木建築事務所より発掘調査の依頼が斐川町教育委員会に提出され、出雲郡家閑連遺跡群発掘調査(補助事業)として小野遺跡の調査を行うこととなった^②。

註

1. 左圖参照。工事予定地内を便宜的に南から順に1区・2区・3区と設定した。
2. 2区の試掘調査では遺跡は確認できず、3区の神守I遺跡は湧水のため調査を断念した。

参考文献

1. 斐川町教育委員会 1998『出雲郡家閑連遺跡群第6次発掘調査概報 斐川町文化財調査報告20』
2. 斐川町教育委員会 1996『後谷V遺跡 斐川町文化財調査報告15』



第1図 小野遺跡における過去の調査区

2. 位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡の位置

小野遺跡は鳥根県簸川郡斐伊川町に所在する。斐伊川町は、県下最大にして有数の穀倉地帯として知られる出雲平野の東部に位置する。町の中心を含む大部分を沖積平野(山雲平野)、南部分を標高300m級の仏経山や大黒山を中心とする山地で成る。東を宍道湖に接し、南から北にかけて西側半分を1級河川斐伊川で縁どられる。

遺跡は町西南部の大字神水に所在し、仏経山北麓に接する平野部南端の田園地帯にあり、標高およそ6.2m、斐伊川右岸まで約2kmの地点である。

所在地の地理的形成基盤

遺跡所在地である斐伊川町を含む出雲平野のはとんどは、縄文時代の海進期には海域であったが、縄文後・晩期以降の海退と三瓶山の噴火活動、斐伊川とその西に流れる神戸川の二大河川の沖積作用などによって平野が形成されていく。中・近世、斐伊川上流の山地における製鉄業の隆盛に伴い「鉄穴流し」による大量の土砂流入が、平野の形成・拡大に大きな役割を果たした。それまで日本海に流れ出していた斐伊川が宍道湖へと流路を変え現在の地形に定着したのは江戸時代以降のことである。

ただし遺跡のある仏経山北麓辺りは斐伊川の沖積作用の影響をあまり受けていなかったところのようである。縄文から中世の遺物・遺構が発見され、安定した地理環境が古くからの生活の舞台となっていたことがうかがえる。現在でも丘陵地帯に挟まれた大小の谷あいに集落が形成されている。

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡

町内における遺跡の分布はその大半が南側の山地や低丘陵地帯、あるいはそれらに囲まれた谷部に集中している。その中でも特に全国的にも著名なものに、大量の青銅器の埋納遺構として知られる神庭荒神谷遺跡がある。

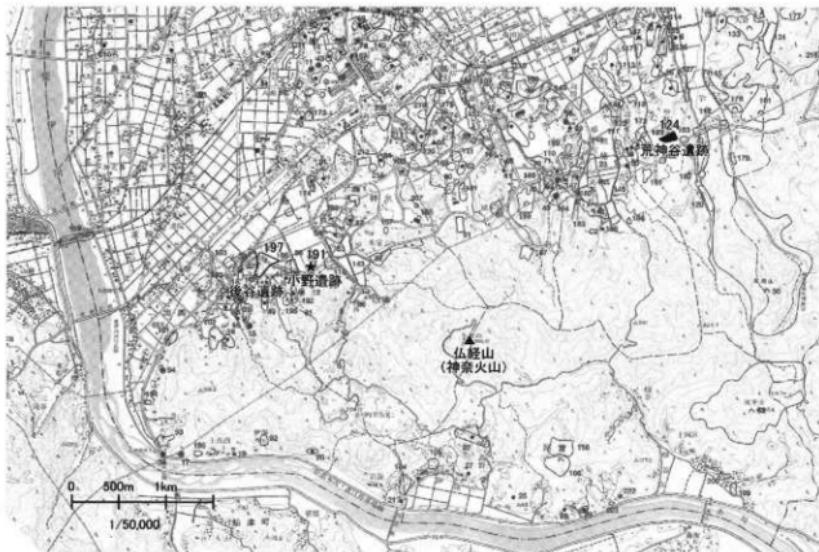
小野遺跡周辺でも、低丘陵地帯にはさまれ大小に谷が入り組む複雑な地形に沿って遺跡が密集する。最も古い時期の遺跡に、縄文土器が出土した上ヶ谷遺跡、後谷V遺跡がある。これらは谷間を流れる川近くの低湿地に位置する。

丘陵地上には円墳、方墳が築かれ、城山古墳群、長者原古墳群、押屋古墳群、後谷丘陵古墳群、その西側の丘陵群に横穴式石室をもつ出西子丸古墳群などがある。横穴墓には後谷町道脇古墳がある。中世には城山城、神守城などといった山城が築かれた。

また『出雲國風土記』(733年)によれば、本遺跡の所在する谷一帯は、奈良時代において出雲国出雲郡出雲郷に所属していたという。さらに出雲郡の条に「山雲郷。印郡直属。」とあり、政治の中心地である郡家は出雲郷にあったと記されている。本遺跡より西方0.5km地点にある後谷V遺跡は大景の炭化米とともに、礎石建物遺構等が検出され、出雲郡家の正倉院跡と比定されている。

参考文献

- 斐川町教育委員会 1972『斐川町史』
- 斐川町教育委員会 1996『後谷V遺跡 斐川町文化財調査報告15』
- 斐川町教育委員会 1998『ふるさと農道緊急整備事業有間農道改良工事に伴う上ヶ谷遺跡発掘調査報告書 斐川町文化財調査報告21』



第2図 後谷遺跡・小野遺跡と周辺の遺跡

- | | | |
|---------------|---------------|-----------------|
| 191. 小野遺跡 | 85. 神守Ⅰ遺跡 | 105. 下阿宮Ⅱ遺跡 |
| 12. 外ヶ市古墳 | 86. 和西Ⅰ遺跡 | 107. 後谷町道脇古墳 |
| 13. 出西小丸古墳群 | 87. 城山東古墳群 | 116. 氷室Ⅲ遺跡 |
| 15. 稲城古墳群 | 88. 外ヶ市Ⅰ遺跡 | 119. 斐伊川鉄橋遺跡 |
| 16. 山ノ奥横穴群 | 89. 神守Ⅱ遺跡 | 124. 荒神谷遺跡 |
| 17. 海の平横穴群 | 90. 新在古墳 | 143. 氷室Ⅳ遺跡 |
| 18. 八幡宮横穴 | 91. 長者原古墳群 | 158. 稲城丘陵古墳群 |
| 19. 岩棚上横穴 | 92. 上出西Ⅰ遺跡 | 159. 城山城跡 |
| 20. 岩海横穴群 | 93. 上出西Ⅱ遺跡 | 166. 有間谷遺跡 |
| 26. 横手古墳 | 94. 劍先横穴群 | 167. 有間谷Ⅱ遺跡 |
| 32. 出西・伊波野一里塚 | 95. 後谷横穴群 | 174. 神守城跡 |
| 33. 沢田横穴群 | 96. 後谷Ⅰ遺跡 | 190. 和西Ⅱ遺跡 |
| 34. 出西岩極跡 | 97. 後谷Ⅱ遺跡 | 192. 押屋古墳群 |
| 44. 後谷古墳 | 98. 後谷Ⅲ遺跡 | 193. 後谷丘陵古墳群 |
| 45. 登道古墳 | 99. 後谷Ⅳ遺跡 | 194. 中出西Ⅱ遺跡 |
| 49. 後谷東古墳 | 100. 神水三メ田古墳群 | 195. 海の平遺跡 |
| 54. 城山古墳群 | 101. 中出西Ⅰ遺跡 | 196. 郡家（長者原）推定地 |
| 56. 三井古墳 | 102. 山ノ奥Ⅰ遺跡 | 197. 後谷遺跡 |
| 81. 神守古墳群 | 103. 沢田Ⅰ遺跡 | 198. 稲城遺跡 |
| 82. 氷室Ⅰ遺跡 | 104. 下阿宮Ⅰ遺跡 | |
| 83. 氷室Ⅱ遺跡 | | |
| 84. 神永古墳群 | | |

3. 調査の概要

調査の目的

平成5・9年度の調査で検出された大型建物群の規模・性格を確認すること、これによって律令社会における都家関連施設の姿を明らかにすること。

調査の期間

平成14年度（2002年）1月9日～3月26日
平成15年度（2003年）4月3日～6月17日

調査区の概要

平成5年度調査区の延長線上に第2・第3トレンチを設定し（第3図参照）、さらに遺跡範囲の確認のために、北東位置に第1トレンチを設定した。以下に各トレンチについての概要を記す。

○第1トレンチ（14年度）

・80m² 掘削深度2.6m

表土下0.5mより斐伊川の洪水堆積物と思われる花崗岩質砂層があり、湧水を伴う。表土下1.2mに遺物包含層があり、平安時代以降の土師器が十数点出土。遺構は検出できなかった。

○第2トレンチ（14・15年度）

・110m² 掘削深度2.3m

試掘調査において集石群が見られたため、調査範囲を広げ確認を行った。その結果約1.5mの幅で調査区をほぼ東西に横切るかたちで石列が確認された。石の直径は約20cmの切石で、意図的に置かれたものと思われる。これらの周囲からは奈良時代前半の軒丸瓦・鶴尾瓦・須恵器、中世土師器が多数出土した。築造された時代については平安～鎌倉時代前後と思われる。この石列の性格については現段階では不明である。

○第3トレンチ（15年度）

・180m² 掘削深度1.9～2.3m

試掘において須恵器片を多數確認したことから、範囲を広げ調査を行った。表土から1.6m下方（標高6.2m）地点で古代～中世の跡跡を検出した¹³。田面には多数の足跡（人及び動物）と稻根痕が、花崗岩質の斐伊川洪水

砂層（厚さ0.2m）でパックされる形で残されていた。砂層からは中世の木簡（呪符木簡を含む）が出土した。須恵器が集中して出土層は田面からさらに下方約0.4m地点（標高5.8m）で、一括して奈良時代のものである。壺・壺・高杯などが出土した。

なお、冒頭挿図にある今回調査区以北（1区第1トレンチ北、2・3区）について、試掘を行ったが、地表（田面）下0.5m～1.5mで砂層と地下水が重なり、壁面より噴出し、前述の地下地質調査報告書（中村；1988）の結果とも併せて、遺構面が地表下5m付近にあることから今回の工事に関しては調査不可能と判断した。

基本層序

これまでの出雲郡家間連遺跡群の発掘調査によって、上から泥質層、礫質層、基盤岩からなり、奈良時代の遺構は基本的に礫質層上面にあることが明らかになっている。遺跡地内の地下地質調査によれば（中村；1988）、遺跡所在地は、奈良時代以前は山地稲部に発達した扇状地であったが、以降、簸川平野の拡大に伴う斐伊川床高度の上昇によって後背湿地化したという。本調査の層序は第4図に示す。

調査終了時の遺跡の保護

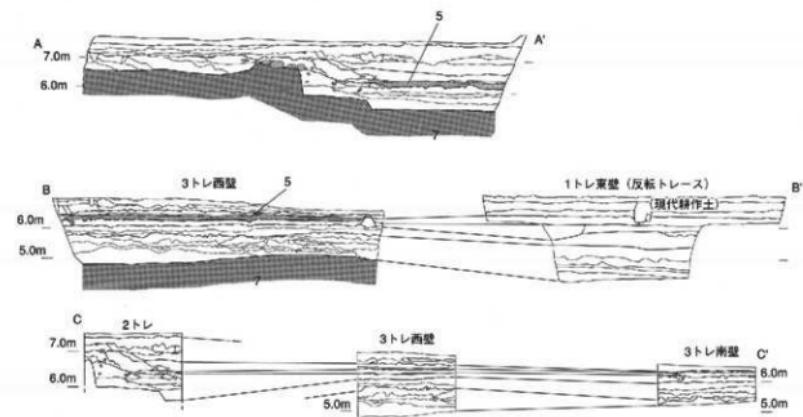
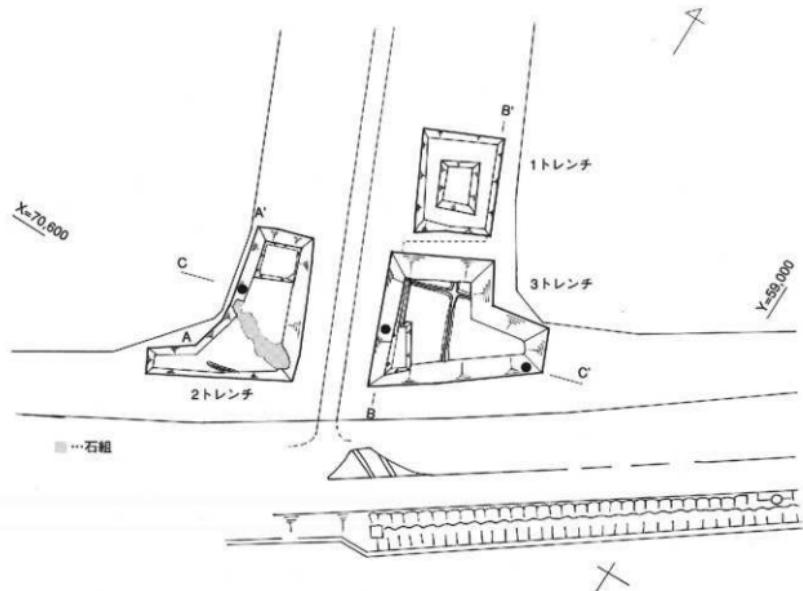
第2・第3トレンチ遺構面を川砂で0.3m被覆し保護したうえで工事を行っている。県教委との協議の上、今後の周辺調査に委ねることとした。

註

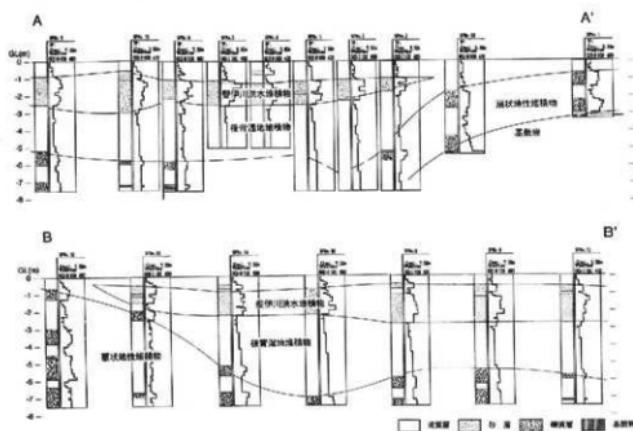
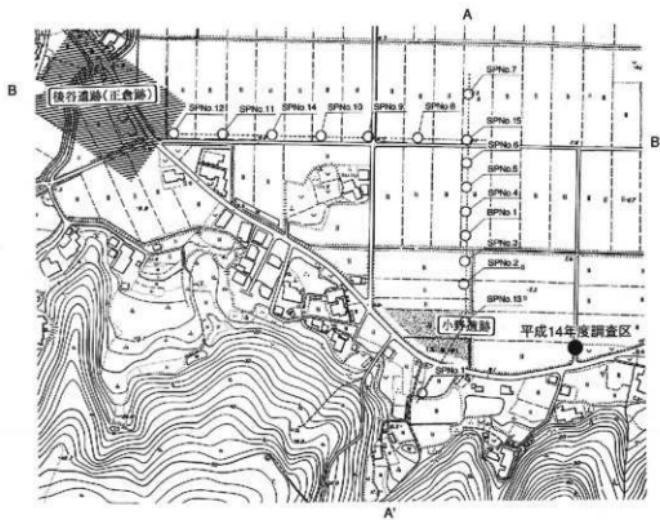
1. 文献1の中で中村氏は、小野遺跡内の礫質層が土地利用するには低すぎること、上位の泥質層に奈良時代の時間面があったとしても遺構の存在は低く、水田利用の可能性があることを指摘していた。

参考文献

1. 中村唯史 1998「出雲郡家間連遺跡群の地下地質調査」「出雲郡家間連遺跡群第6次発掘調査概報 斐川町文化財調査報告20」



第3図 トレンチ配置図ならびに基本層序図（配置図 1/500、基本層序図 1/160）



第4図 調査区周辺の地盤（中村；1998に一部加筆）



第2 トレンチ石組み遺構

4. 遺物について

第1節 概要

出土傾向

調査区からは破片でコンテナ換算約10箱程度の量で出土した^①。

土師器・土師質土器がその半数を占める。須恵器は1箱を超える程度の量が出土したが、ほとんどが第3トレンチ7層から集中して出ており、接合関係にある破片が多い。

本遺跡で特徴的な出土品が瓦で、およそ2箱分の量の中に安来市教美寺I b式の軒丸瓦や山陰系鷹尾瓦が確認されている。そのほかに、木簡が4点と陶磁器・鉄器・貨幣・石(石器・剣片)が少量出土している。

時期的傾向

最も古いもので弥生V様式の壺の口縁部が1点確認されている。それに続くものに古墳時代の土師器壺が一定量出土している。古墳時代の須恵器は壺蓋が1点、波状文をもつ壺口縁部が1点とわずかに確認されている。

第3トレンチ7層から出土した須恵器群は奈良時代のものに限られ、8世紀後半以降の須恵器は出土していない。替わって底部に糸切り痕をもつ土師質土器が多くみられる。

遺物の掲載について

種類ごとに形態・技法を観察し、各々まんべんなく抽出した^②。

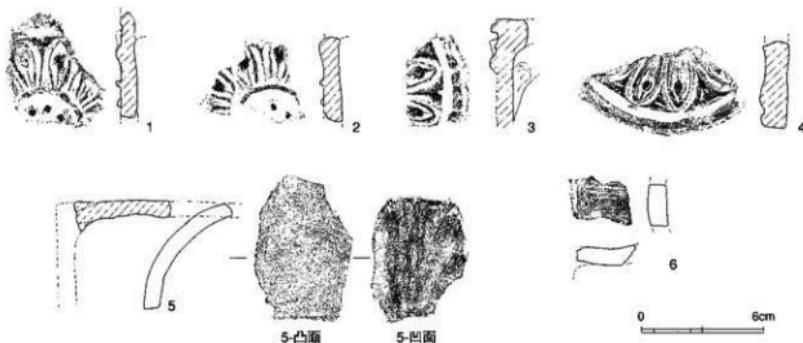
形態・技法に特徴がみられるものは、1点のみの出土であっても図化して掲載した。一方で同タイプのものが多く確認された場合、代表的なものを選んで掲載している。本報告書の掲載遺物の比率がそれぞれの出土量における割合を反映しているものではない。

図化にあたっては、残存部位の径が1/6以上の場合は復元実測し、1/6未満の小片は破片実測を行った。

瓦に関しては、図面掲載は軒丸および鷹尾のみにして、丸瓦・半瓦は残存率が低い小片であるため、分類表を作成するにとどめた。

註

1. 内法35cm×54cm×15cmの標準規格のコンテナ
2. 1~3層出土遺物は対象外とした。



第5図 瓦(軒丸)(S=1/4)

第2節 出土遺物について 瓦

第2・第3両トレンチの7層から出土している。

軒丸瓦(第5図)は破片で6点確認した。このうち4点は教皇寺I式に類するもので、これまで小野遺跡で行われた調査で出土したものと同類である。いずれも尖り形の単弁で弁の輪郭を凸線で縁取り、中心に稜線が通る。弁の先端付近に半球状の隆起がある。この隆起上の稜線は省略される。3はヘラ削りで文様を調整している。4は凹凸が浅く、模様が甘い。

鷲尾(第6図)は破片で5点確認した。1～3は山陰地方独特の、貼り付け突帯で段型を表すタイプのものである。色調は青灰色、焼成は良好の硬質な須恵質である。4は外面調整に直行する2方向の平行文タタキ、内面調整に同心円文タタキを施す。5は灰白色の軟質な胎土

で、内面に布目痕を残す。平瓦の6は凸面にヘラ搔きが確認できたが、絵画か文字かは判別できない。調整は凸面が平行文タタキのち横位の櫛目で、凹面が横ナデと斜位のナデで、胎土は暗青灰色で軟質な須恵質である。

丸瓦・平瓦は小片で多数出土した。器種の判別が可能で端部が残っているものを対象に、分類表を作成した(第1表・第2表)。対象破片数は35点で、全体のおよそ10パーセントになる。

凸面に平行文タタキを施すものが最も多く、横位の櫛目がこれに次ぐ。平行文タタキは、後にナデ消すものと横位の櫛目で調整するものの2タイプが確認された。これらの凹面の調整は斜位のナデがほとんどである。さらに、粘土絆痕が残るもの、端部に段をもたない行基式と呼ばれるものがある。

第1表 平瓦分類表

凸面 凹面	布ナデ	格子状タタキ	平行文タタキ		横位の櫛目	縦位の櫛目
			ナデ	横位の櫛目		
布目				1		
布目+斜位の櫛目				1		
縦位のケズリ	1					1
横位の櫛目			1	1		
横位のナデ						1
斜位のナデ					3	1
横位のナデ+斜位のナデ				1	*1 5	*2 1
磨耗					2	

*1 うち行基式1・線描1 *2 うち行基式1

第2表 丸瓦分類表

凸面 凹面	平行文タタキ		横位の櫛目	縦位の櫛目	磨耗
	ナデ	横位の櫛目			
布目					1
同心円文タタキ	1				
横位の櫛目	2				
横位のナデ		*1 1	*3 6		
横位のナデ+斜位のナデ		*2 2	1		
磨耗					1

*1 うち粘土紐1

*2 うち粘土紐4

*3 うち粘土紐4

(玉縄式3・行基式1)

木簡

今回出土した4点は全て第3トレンチ5層からのものである。5層は斐伊川の氾濫土層である(p4. 基本層序について参照)。うち、墨書が認められたのは2点で、いずれも呪符木簡である。

第7図1は上端が圭頭状を呈し、下端に穿孔が認められる。噫々如律令の墨書が確認され、2ヶ所を意図的に折る⁽¹⁾。2は下半を欠くが1と同様、噫々如律令の墨書、上端圭頭状を呈す。厚みはそれぞれ0.4cm、0.35cmを測る。3は下端に穿孔する(横方向ではない)。墨書は確認できない。

鉄器

第7図4は第2トレンチ7層から出土した。薄い円盤状で、中央が突出する。容器の蓋あるいは湯口が考えられる⁽²⁾。5は第2トレンチ石組みからの出土で長頸鎌である。鎌身部を欠く。残存長19.0cmの3分の2あたりから緩やかに1回転捻り、先端部付近で強く2回転捻る。

石器

第7図6は複合石器で、側面を砥石に、下面を擣り石に利用され、使用痕を伴う面をもつ。さらに下面是たたき石としても使われた痕跡が残る。7は打製石鎌で、厚みのある石材の両側縁に急角度の調整で刃部を作り出すが、片方の刃部はつぶれて丸みを帯びる。基部に二方向の平坦面をもち鋭角を形成する(図中矢印は平坦面の範囲)。

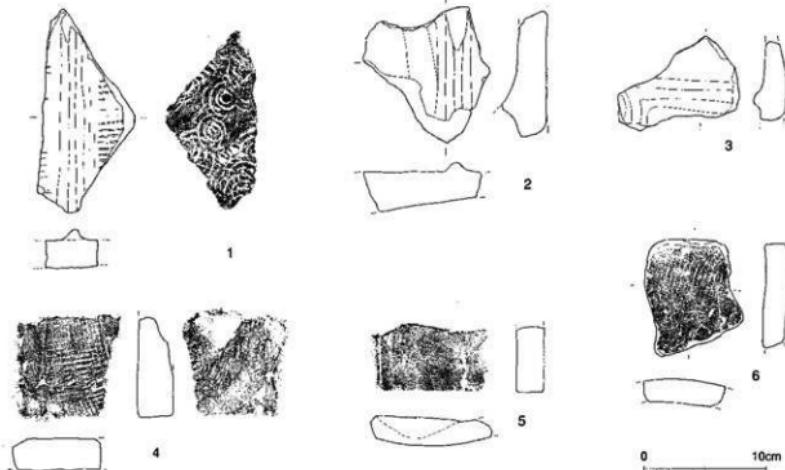
8・9は砥石である。8は第2トレンチ石組みから出土した。乳白色の石材で残存側面3方向全てに凹面を持ち、中央部の厚みが最小で1.2cmと薄く、使用頻度が高い。9は第3トレンチ7層出土で板状の隅丸長方形を呈す。6面全てを使用する(図中矢印は使用面の範囲)。

銭貨

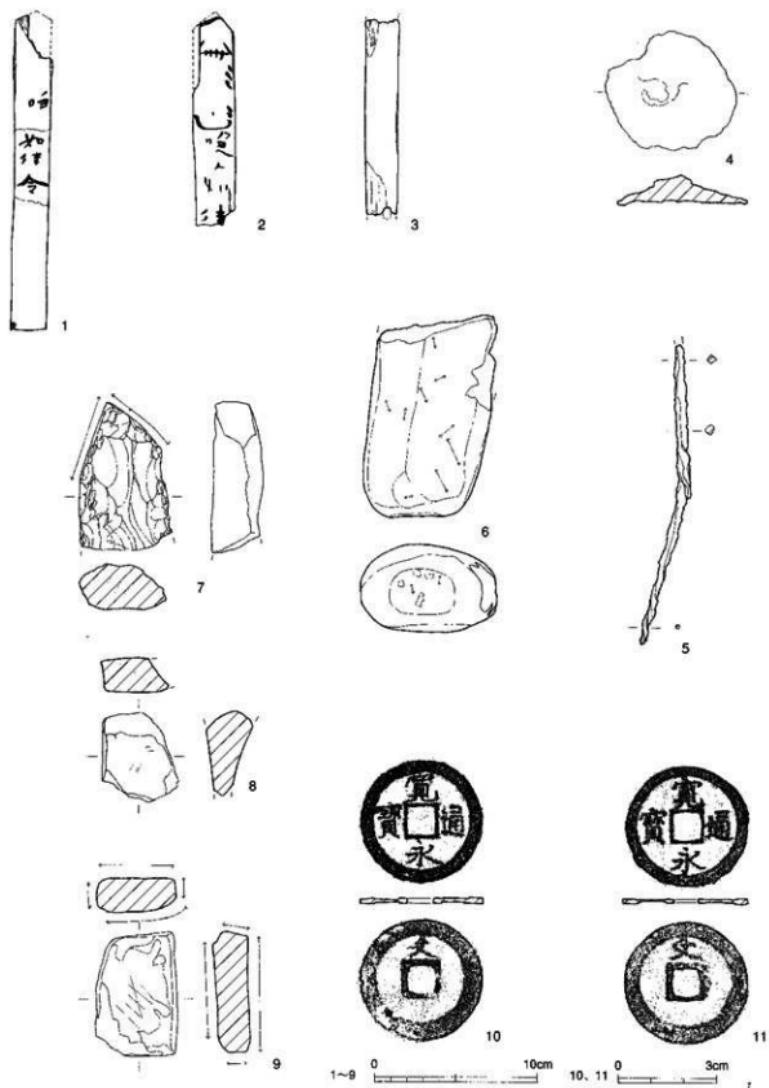
第7図10・11は寛永通宝である。遺存状態は良好で最大径25.1cm、最大厚1.2cmを測る。

註

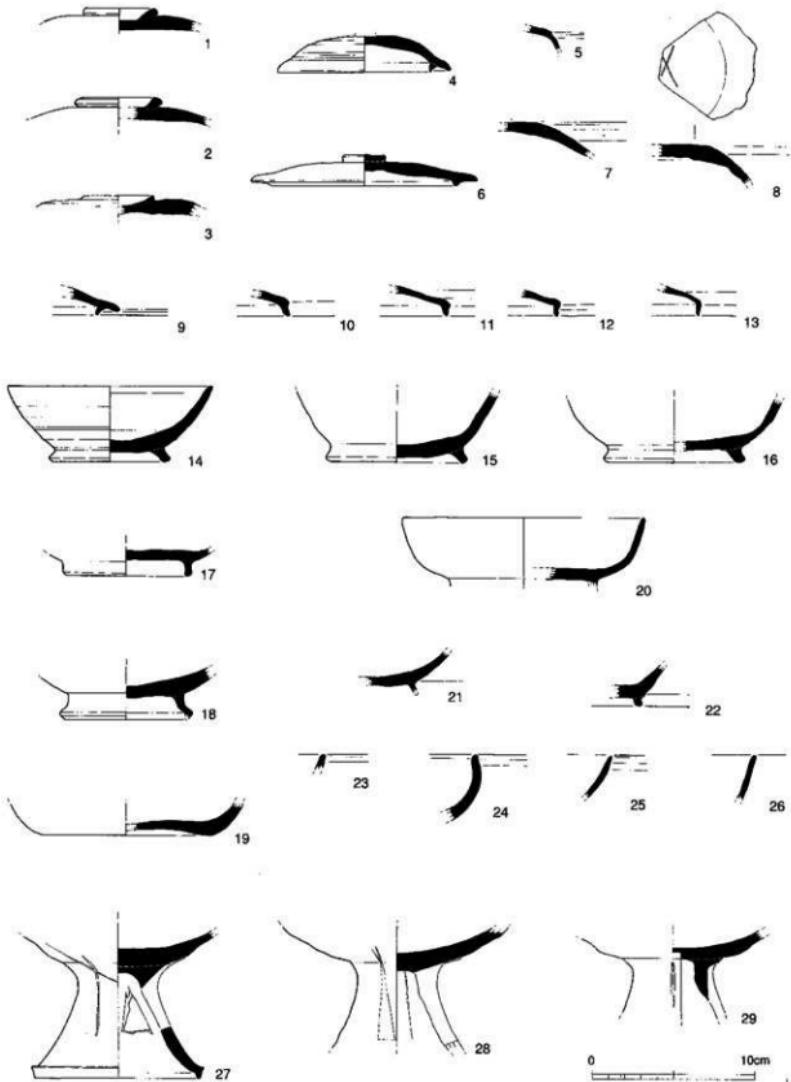
1. 佐藤信氏ご教示による。
2. 津田正明氏ご教示による。



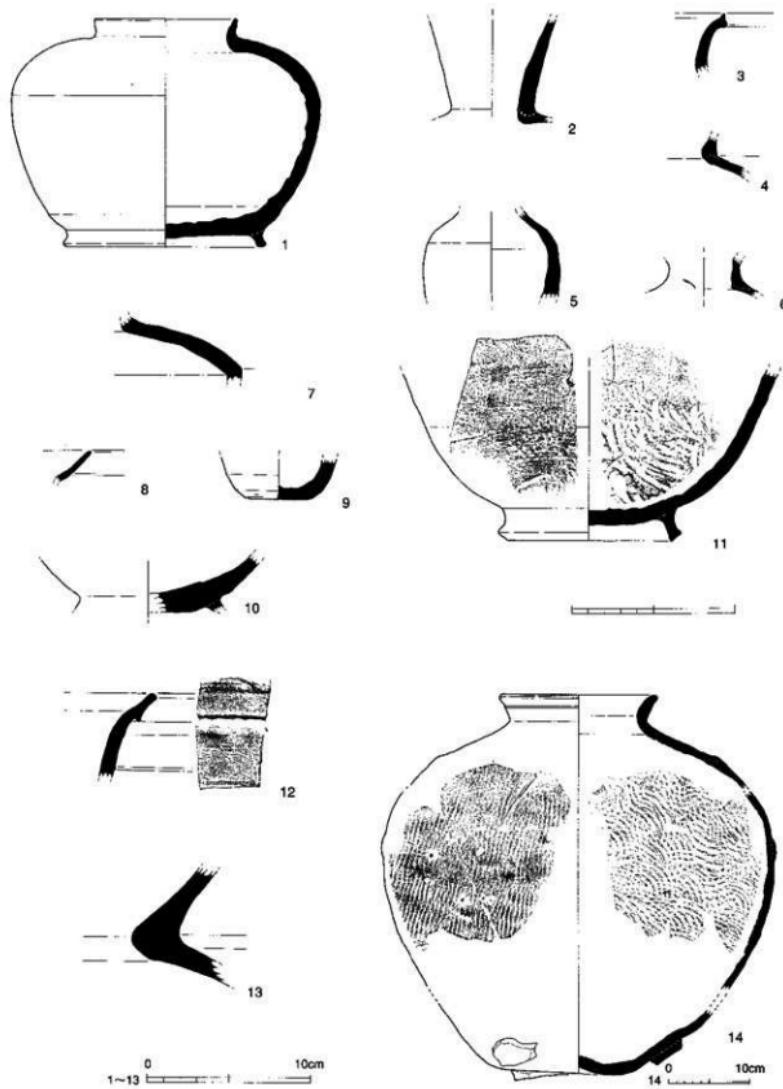
第6図 瓦(鶴尾、平瓦)(S=1/4)



第7図 木簡・鐵器・石器・錢貨 (1~9; S=1/3, 10・11; S=1/1)



第8図 須恵器 (S=1/3)



第9図 須恵器 (1~13; S=1/3, 14; S=1/6)

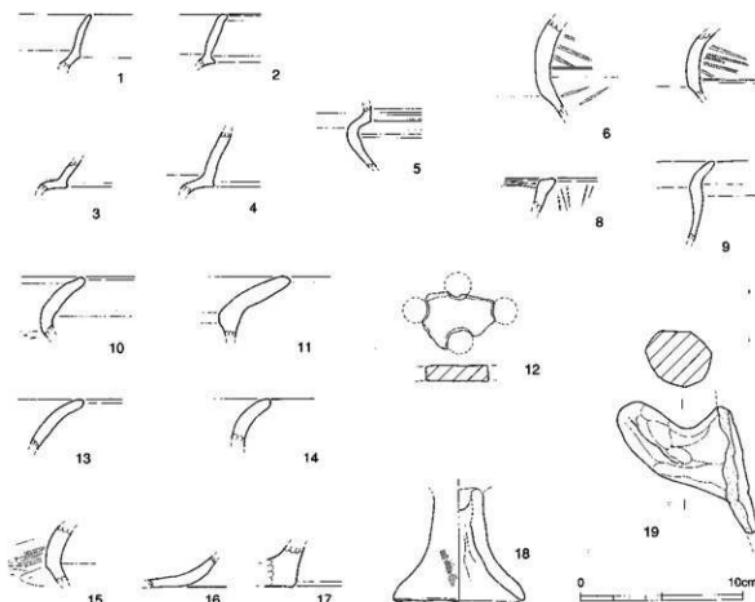
須恵器（第8図・第9図）

出土したほとんどが第3トレンチ7層からのものである。一部古墳時代のものが混じるが、およそ8世紀におさまる。

第8図1~13は壺蓋である。1~3は輪状つまりである。3はつまみ端部に面をもたない。内側から強くなれて、断面が三角形状を呈す。4はかえりを有する。宝珠つまみを欠く。天井部はヘラ削りで曲面を形作る。5は古墳時代の壺蓋で第3トレンチ7層から出土した。天井部と体部との境に段を有する稜を持つ。6は頂部を平坦につぶす宝珠つまみで、器形も低平、口縁端部に浅い突帶状のかえりがつく。8は第2トレンチ7層からのもので天井部にヘラ記号を刻み、内面中央に強い工具痕が残るのが特徴的である。9はかえりが強く内傾してつき、外反して接地する。10~13は口縁端部を下方に折り曲

げる。10は内面に墨が付着する。（写真図版4）

14~26は壺身である。しっかりした高台が中央寄りに付き、底部から緩やかに湾曲して立ち上がるタイプが殆どである。19が回転糸切り痕を残すほかは底面をナデ消す。14は曲面的な底部に対し高台が中央寄りにつき、ハの字にひらく。底部から緩やかに内湾して立ち上がり、外上方にのびる口縁部は体部と境を持たない。16は平面的な底部にしっかりした高台がつき、体部は曲面的に立ち上がる。17は平面的な底部に直立した高台がつく。18は高めの高台で、外下方に屈曲してひろがり、端部をつまんで下方に突出して接地する。端部外縁に面をもつ。22~26は低平な高台に直線的な体部を持つ。23~24は口縁端部外縁に沈線をほどこし、端部が平縁状を呈す。25は口縁端部に平坦面をつくり、端部を薄く仕上げる。



第10図 弥生土器・土師器 (S=1/3)

27～29は高杯である。27は2方向に透かしをもち、同一ではない。一方は三角形、もう一方は切れ目状である。さらに切れ目状透孔に斜位に交わる直線を刻む。ヘラ記号の一種か。同様に28も三角形と切れ目状の2方向透かしをもつ。斜位の線刻はない。29の透孔は1方向のみで、切れ目状である。

第9図1は短頸壺である。底部切り離しは回転糸切りによるもので、ナデ消す。2・3は長頸壺、4～6は小型の壺で、6は頸部外面に爪型痕を残す。7は壺あるいは瓶類の肩部で肩部と体部の境に稜を有する。8は瓶の口縁部、9は小型壺の底部、10・11は壺または壺の底部で高台を有する。

12は古墳時代の壺口縁部の小片で、口縁部外縁に下方に突出する面を持ち外面に波状文を施す。13は壺の頸部小片で、器壁が厚く、大型的印象である。頸部は外傾して立ち上がる。14は口縁端部に面をもち、外面に浅い1条沈線をめぐらす。底面付近に数箇所、別個体破片が溶着する。

弥生土器

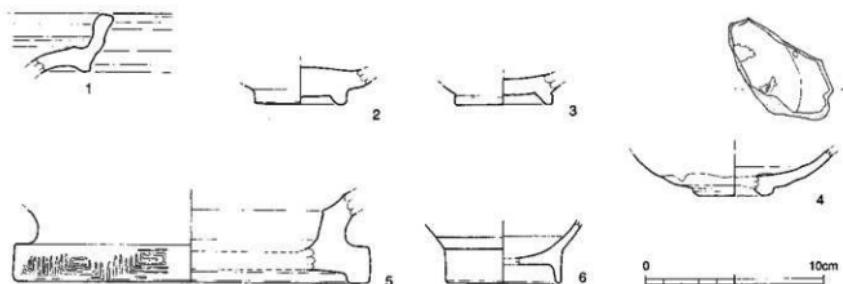
第10図5は3トレンチ7層からの出土で、口縁部外縁に帯状の面を有し、外面に凹線文を施す。

土師器

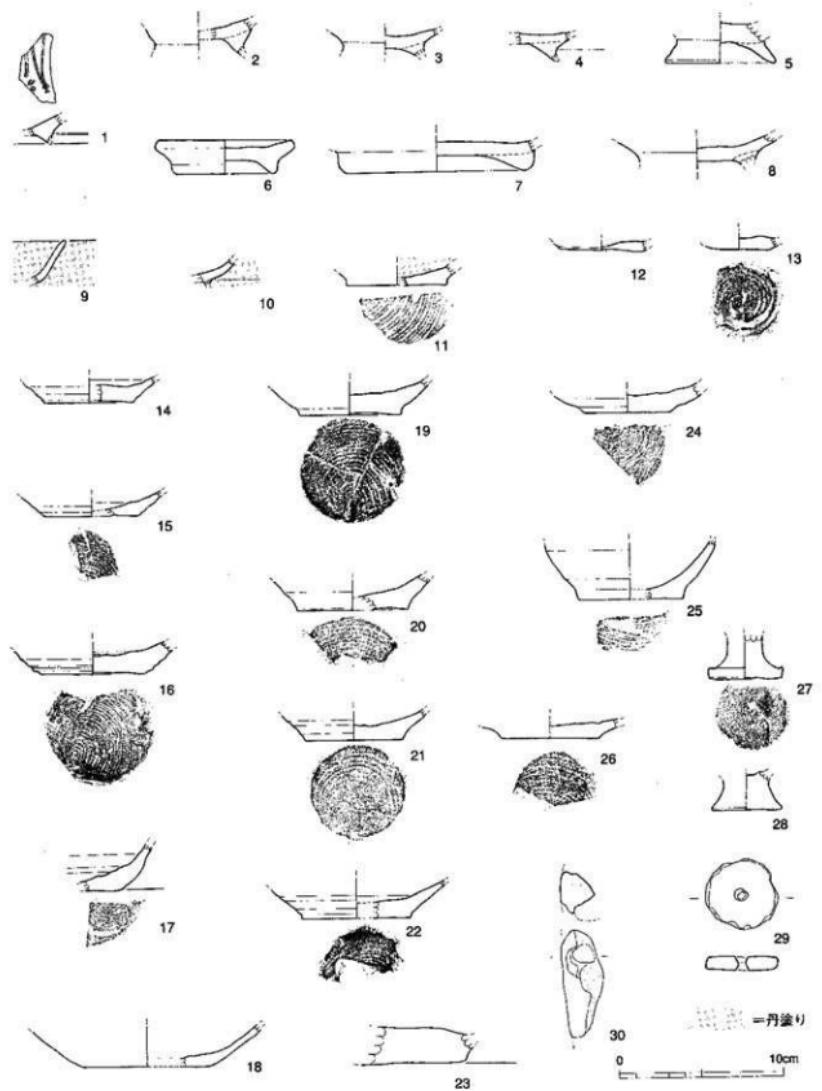
第10図1～4は草田期の壺である。6・7は壺で頸部外面に羽状文を施す。8・9はともに小型の壺で、8は端部に面をもち、外方に肥厚する。口縁部内縁に横位の沈線を施す。9は短く外反する口縁部にほとんどふくらみを持たない体部をもつ。12は4箇所に円孔を穿つ。壺の底部の可能性が考えられる。16は壺底部で、内面に横位の櫛目を施す。17は壺底部である。18は高杯で、内側から脚内部に粘土塊を充填する。外面にハケ目調整、内面に絞り目を残す。19は壺の把手である。上面内湾部を削る。粘土塊つなぎ目痕を残す。

陶磁器

第11図1・2は2トレンチ7層から出土した。1は、し器系の壺である。2は削り出し高台で、疊付および高台内面が露胎するほかは、内外面に淡緑灰色の釉薬がかかる。3・4は2トレンチ3層から出土した。3は削り出し高台で灰色の釉薬を全面に施す。4は内面残存部3箇所に砂目積み痕を残す。5・6は2トレンチの4層出土でいずれも19世紀のものである。5は駄方火鉢である。ロクロ整形で、外面に施された釉薬は緑色、高台外面は雷文繁ぎの押し型除刻文を施す。6は貼り付け高台で外面に2重圓線、内面は一重圓線の内側に染付け文を施す。



第11図 陶磁器 (S=1/3)



第12図 土器（平安時代以降）・土製品（S=1/3）

平安時代以降の土師器

第2・第3両トレンチ4~7各層から出土している。

第12図1は高台付で内面にヘラ描き線描がみられる。2~5はいずれも小型で、高台は中央寄りに付き、ハの字にひらく。6は高台付皿で口縁端部を面取りするのが特徴的で、寸詰まりの形態である。7は高台付の皿で大型である。9~11は丹塗が施されている。調査区からは多くのいわゆる土師質土器が出土しているが丹塗りのものはごくわずかで、確認できたのは図化した3点のみである。10は高台付で11は高台がつかない底面に静止糸切り痕を残す。いずれも遺存状態は悪く、赤色顔料がかすかに残る程度である。

12は内面中央がへそ状に薄く窪む。底面は磨耗しているため切り離し技法は不明である。

無高台の坏・皿の底部からの立ち上がり形態は2タイプに分けられる。1つは底部から短く立ち上がった後に外傾するタイプで11・19~26がある。もう一つは底部から立ち上がりをもたずに外傾するもので14~18がこれにあたる。

27・28は柱状高台付坏である。27は脚端部に面をもち、28は面をもたない。

土製品

第12図29は筋鉢車で周縁を打ち欠いて整形し、中央に両面から穿孔する。片面に回転糸切り痕を残す。土器破片の利用品である。30は土製支脚で、背面に貫通しない孔を穿つ。腹面側に粘土貼り付け痕を残す（図中網掛けはその範囲）。

参考文献

1. 淀江町教育委員会 1995『上淀廃寺 淀江町埋蔵文化財調査報告書 第35集』
2. 斐川町教育委員会 1996『後谷V遺跡 斐川町文化財調査報告15』
3. 1978『地方史マニュアル6 考古資料の見方<遺物編>』柏香房
4. 島根県古代文化センター 2003『山陰古代文字資料集成 I (出雲・石見・隠岐編)』島根県古代文化センター調査研究報告書14』
5. 杉山秀宏 1988『古墳時代の鐵鏃について』『権原考古学研究所論集 第8集』吉川弘文館
6. 松本岩雄 1992『出雲・隠岐地域』『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社
7. 鹿島町教育委員会 1992『南講武草田遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』
8. 大谷見二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地城色』『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会
9. 大社町教育委員会 2005『大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書 鹿藏山遺跡』

5. 小野遺跡発掘調査にかかる自然科学分析

渡辺正巳

文化財調査コンサルタント株

はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が斐川町教育委員会に提出した報告書を、概報としてまとめ直したものである。

当分析調査は、発掘調査に伴って検出された水田造構の科学的検証および、遺跡近辺の植生復元を行うことを目的として、斐川町教育委員会が文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施したものである。分析試料は、発掘調査に伴って露出した遺跡内トレンチ壁面より採取し、花粉分析、プラント・オパール分析およびAMS年代測定を実施した。

分析試料について

第13図の調査トレンチ平面図に、試料採取地点を示す。各地点の模式柱状図および分析試料採取層準を、各分析結果を示したダイアグラム左端の柱状図右側に示した。AMS年代測定試料はNo.1地点で採取した小枝で、採取層準を柱状図左側に測定年代値とともに→で示した。

分析方法

花粉分析処理は渡辺(1995)に、プラント・オパール分析処理は藤原(1976)のグラスビーズ法に従い行った。

分析結果

花粉分析結果を第14図に、プラント・オパール分析結果を第15図に示す。また、AMS年代測定結果を表1に示す。

第14図の花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基數にし、各々の木本花粉、草本花粉について百分率を表した。また花粉ダイアグラム右

側に、「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「胞子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基數にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。また花粉粒の同定にあたり、中村(1974)に従い、イネ科をイネを含む可能性の高いイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性の低いイネ科(40ミクロン未満)に細分している。

第15図のプラント・オパールダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群毎に示した。

花粉分帶

花粉分析の結果を基に局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向かって記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

(1) II 帯 (No.1 地点試料No.5~3)

マツ属(複雑管束亞属)、スギ属が卓越傾向にあり、アカガシ亞属、コナラ亞属を伴う。これらのうち、マツ属(複雑管束亞属)は増加傾向を示す。

草本花粉の出現傾向から、イネ科(40ミクロン以上)、キク亞科、ヨモギ属が高率を示すc 亞帯(試料No.5)、イネ科(40ミクロン以上)、キク亞科は増加、あるいは同程度の出現率を示すが、ヨモギ属が減少するb 亞帯(試料No.4)、イネ科(40ミクロン以上)、がさらに増加するが、キク亞科、ヨモギ属が減少するa 亞帯(試料No.3)に細分した。

(2) I 帯 (No.1 地点試料No.2、1)

マツ属（複維管束亞属）がさらに増加し、スギ属は減少する。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が引き続き高率を示し、ソバ属も低率ではあるが出現する。

AMS 年代測定結果、出土遺物の年代観と各花粉帯の年代観

各ダイアグラムには、出土遺物から推定された堆積年代のほか、AMS 年代測定値も示している。

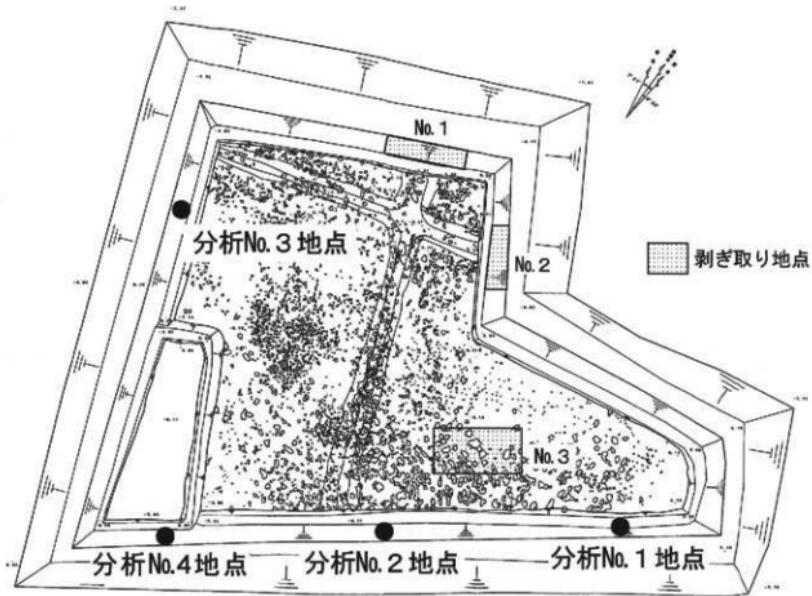
得られた、およそ AD1300~1405 cal y. (600±30 yr.B.P.) という年代は、中世中頃（鎌倉時代末から室町時代にかけて）の西暦である。

このことは、出土遺物から推定される先立つ各層準の堆積年代が平安時代、さらに奈良時代に堆積したと考えることに矛盾はない。

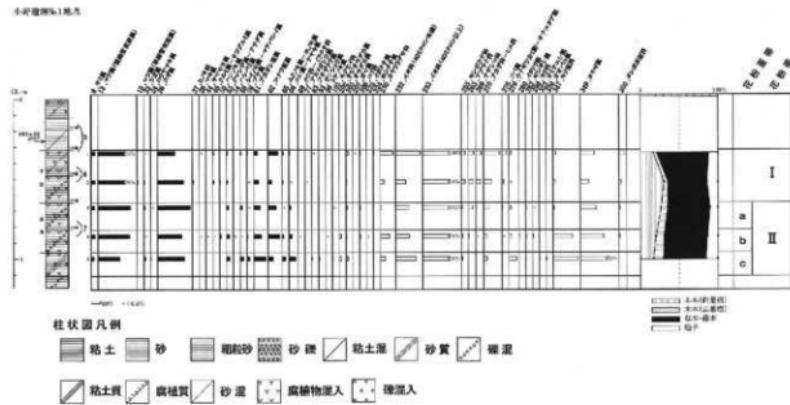
さらに花粉組成を大西（1993）の花粉帯に対比すると、マツ属（複維管束亞属）が増加傾向を示すが50%程度までであること、スギ属、アカガシ亞属、コナラ亞属を伴うことから、I、II 帯ともにイネ科花粉帯カシ・ナラ亞帯に対応する。カシ・ナラ亞帯の下限年代は AD 5~12 世紀（渡辺ほか、2003）、上限年代は AD16 世紀（大西、1993）とされており、のこととも矛盾しない。

耕作土の認定

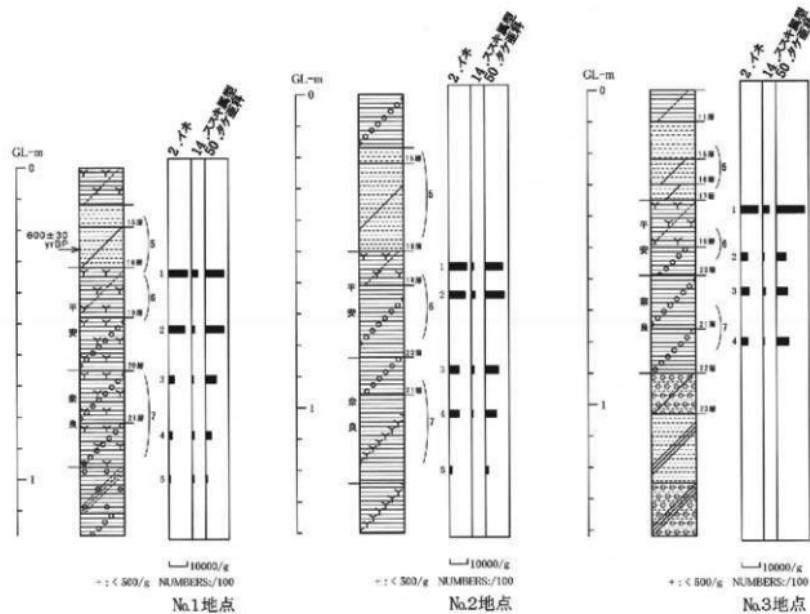
5 層の洪水砂に被われた 6 層上面では凸地が方形の区画を成し、人間の足型を示す多数の凹地が観察された。一方、6 層のプラント・オーバール分析結果では、イネが 10000 個/g 程度と多量に検出されている。また、花粉分析でもイネに由来すると考えられるイネ（40 ミクロン以



第13図 資料採取地点（第3トレンチ）



第14図 NO. 1 地点の花粉ダイアグラム



第15図 第3 トレンチのプランツ・オーバルダイアグラム

上) 花粉が200%に近い出現率を示した。以上のことから、6層が耕作土(水田跡)であると断定した。

また6層より下位の層準では遺構が検出されないものの、7層まではイネのプラント・オバールが多産傾向にあり、稻作が行われた耕作土が連続している可能性が指摘できる。このことは、同層準でソバ属花粉が僅かながらも産出する(ソバ属花粉は栽培種のソバに由来すると考えられる。ソバは畑のほか、田の畦などでも栽培される。)ことからも示唆される。

古環境変遷

ここでは、諸分析結果より推定できる古環境について、花粉帯毎に述べる。

(1) II带期(奈良時代)

マツ属(複維管束亞属)花粉、スギ属花粉が卓越傾向にあり、アカガシ亞属花粉、コナラ亞属花粉を伴うことから、遺跡近辺の谷沿い斜面にはスギが、周辺の丘陵にはアカマツやコナラ類を主要素とする「薪炭林(里山)」が分布し、さらにここから中国山地にかけてはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。また、付近では薪炭林(里山)拡大の傾向にあったと考えられる。

さらに細かい時期毎に、調査地点近辺の草地の植生について推定される。

① c 亜帯期

イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率は57%と高率を示し、キク亞科(特にブタクサtypeが顕著)花粉、ヨモギ属花粉も高率を示す。またイネのプラント・オバールの検出量も低く、地層が横方向に連続しないことから、周間に水田があったものの試料採取地点は水田ではなかったと考えられる。また近辺には微高地も存在し、キク科の雑草が茂っていたと考えられる。

② b 亜帯期

イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率は91%とほぼ倍増する一方で、ヨモギ属花粉の出

現率はほぼ半減する。また、キク亞科(特にブタクサtypeが顕著)花粉には変化がない。イネのプラント・オバールがやや高率になり、地層(腐植に富んだ粘土)が横方向に比較的連続することから、試料採取地点を含め周間に水田が広がっていた可能性がある。また、ソバ属花粉も複数個体観察され、休耕田や畦でソバが栽培されていたと考えられる。

③ a 亜帯期

イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率は102%とさらに増加し、キク亞科花粉、ヨモギ属花粉の出現率はさらに低下する一方で、同層準のイネのプラント・オバールの検出量は多くなる。b 亜帯同様、地層(腐植に富んだ粘土)が横方向に比較的連続することから、試料採取地点を含め周間に水田が広がっていた可能性がある。また、ソバ属花粉も複数個体観察され、休耕田や畦でソバが栽培されていたと考えられる。

(2) I带期(平安時代~中世)

スギ属花粉が減少傾向を示すほか、アカガシ亞属花粉も緩やかな減少傾向を示すなど、自然植生の要素が減少する。一方でマツ属(複維管束亞属)花粉、コナラ亞属花粉などの人為植生を構成する種類が増加する。周辺の丘陵や中国山地縁辺でもアカマツやコナラ類を主要素とする「薪炭林(里山)」で被われ、山地深部や局所的に本来の自然林であるカシ類を要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。

この時期のスギ属花粉の減少は、例えば出雲市の三田谷I遺跡でも認められる(渡辺, 2000)。直接の原因は異なるにしろ、有用材としての需要が増し、伐採が進んだことが一因と考えられる。

一方遺跡内では継続して水田耕作が行われていたと考えられるが、中世中頃に起こった洪水により、一気に砂で埋まったと考えられる。その後、砂を除去することではなく、新たに客土することにより水田が復興したと考えられる。

第3表 ^{14}C 年代測定結果

試料 No.	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C (yrBP)	曆年代 ^{a)} (cal y.)	測定番号 (PLD)
HO-1	610±30	-25.9	600±30	AD1300-1370 AD1380-1405	2254

* 1 * 2 sigma, 95% probability

まとめ

水田遺構の科学的検証（花粉分析およびプラント・オバール分析）により、砂層（5層）で被われ砂質粘土層（6層）が耕作層であることが断定できた。

この他花粉分析の結果、遺跡近辺から周辺の古植生を推定した。特筆すべき点は以下の事柄である。

- ① 奈良時代頃から、遺跡近辺の水田化が始まった。
- ② 周辺の水田化と共に、ソバ栽培が行われた。
- ③ 古代から中世にかけてスギ林が縮小した。同時期に薪炭林（里山）が拡大した。

引用文献

- 大西都夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分带と植生変化。地質学論集, 39, 33-39.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として。第四紀研究, 13, 187-197.
- 藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法。考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳（2000）三田谷I遺跡c区発掘調査に係る花粉分析。塩冶299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書三田谷I遺跡, 65-70. 出雲市教育委員会、島根県。
- 渡辺正巳・佐伯純也・平木裕子（2003）目久美遺跡発掘調査における花粉層序の成果。鳥取地学会誌, 7, 1-9.

6. まとめ

小野遺跡の所在地一帯は松江市出雲国庁跡から西に行くこと直線距離にしておよそ30km、古代の山陰道で丘陵地から転して視界が一気にひらける平野の入口であった。ここからさらに西に0.5km進むと郡家正倉跡と比定される後谷V遺跡がある。

出土した遺物からみる本遺跡は、総括して、弥生時代～現代（現在は水田）まで断続的ではあるが、統いており、遺物がまとまって出土しているのが7世紀後半～8世紀後半の須恵器群と、これより時代が下るいわゆる土師質上器と呼ばれる土師器の壺・皿である。これまでの調査からは、各種硯、墨書き土器、桃の種子も出土している。

本遺跡を最も特徴付ける遺物が瓦で、山陰型鷲尾⁽¹⁾、教吳寺⁽²⁾ I式と呼ばれる軒丸瓦が出土している。過去の小野遺跡の調査ではこれ以外にも神門寺境内廃寺⁽³⁾出土のものと同類の軒丸瓦も確認されている。

平成5年度の調査で本遺跡から検出された建物群は、当初は後谷V遺跡との位置関係から官衙的な遺構であると見られていたが、これまでそれを明確に裏付けるには至っていない。平成9年度の報告では、出土遺物に瓶・壺・土製支脚などといった生活用具が含まれること、遺構に倉庫建物が存在することから、前述の遺構群は、庁舎ではなく館あるいは厨家、寺院関係ならば雜舍風の建物の可能性、それ以外にも有力豪族の居宅等が想定されている。今回を含めて、これまでにも出土遺物に托・火舍・灯明皿・鉄鉢型土器等、寺院関連遺跡からおよそ出土するといわれているものは混じらない。

今回の調査では、柱穴等建物関係の遺構はなく、奈良～平安時代の石組みと、平安時代の畔が検出された。

畔は検出面が平安時代～中世であるとの自然科学分析結果が出ている。渡辺氏の分析の結果では、水田化は奈良時代頃から始まり、ほぼ

同時期に杉林が縮小し、薪炭林（里山）が拡大したと推定している。これは出土土器年代観とも矛盾しない。このことは奈良時代に一帯が大規模な開拓・開墾が行われたことを示唆している。検出田面下からまとまって出土した須恵器群が蓋壺・甕類・ハソウなどといった食器類であることもあわせて興味深い。

また本調査区の石組みと平成9年度調査区の礫溜りとの関連は、後者の報告書の中で、築地などといった基礎構造が認められないことなどから遺構として扱いにくいと述べられていることと、また、いずれの調査区も狭い範囲から検出され、かつ、調査区間の距離がおよそ120mと離れており、連続性を確認できないことから、現時点では関連性は認められない。ただし平成5年度調査区から本調査区の石列につづくかたちで南北に検出されているので、今後も注意して全体像を追っていく作業が必要である。

以上述べてきたが、本調査の成果として特筆されるのは、奈良・平安期の水田遺構（畔）が出雲郡家周連遺跡地内で初めて検出されたこと、さらにその年代が自然科学分析および出土遺物によって明らかにされたことの2点が挙げられる。これによって古代における郡家周辺域の様相の一端が明らかになった。

今後の課題としては、水田遺構と正倉の関連性、および石組みの性格の検証、出土瓦などから、同時期の斐川町阿官の天寺平廃寺などと併せてこの地域の初期仏教文化の研究があげられる。これらに関しては周辺の遺跡の調査が進むことに期待したい。

註

1. 因幡の吉岡大海廃寺、正鉢等ヶ坪廃寺、上原南遺跡、伯耆の上淀廃寺、野方・弥陀ヶ平廃寺、出雲の来美廃寺、四天王寺跡（寺の前遺跡）、当遺跡で確認されている。

2. 島根県安来市。白鳳・奈良時代の寺院跡。出雲國風土記に記載されている教吳寺と比定されている。

3. 島根県出雲市。出雲國風土記記載の新造院跡か。

観察表

序文 花か分類
A 常緑花が必須のものに限る。介の半片葉は近が先、後から寄りに開く。葉身は1年の周期がある
B 葉の葉脈に網状のもので、花序は枝先に開く。葉身は1年の周期がある
C 葉の葉脈に網状のもので、花序は枝先に開く。葉身は1年の周期がある
(中括弧内数字は通巻番号、花序の葉脈と花序葉の葉脈を併記する場合に葉脈番号を記す)

第4表 瓦

図面No.	実物No.	種類	器種	地区	部位・遺存	形態・文様の特徴・調査	胎十・色調・形状	法量(cm)	残存率	備考
6-1	40	瓦	軒丸	2トレス	7箇	墨了板:不規則:小房:花弁:單弁:垂定12介/B/ 瓦井:中房:中房:外区:墨井:花弁:單弁:垂定12介/B/ 蓋子數:不規則:中房:花井:花弁:單弁:垂定12介/B/ 井:中房:中房:外区:墨井:花弁:單弁:垂定12介/B/	やや粗、灰色、やや軽質	瓦当厚:1.7 (瓦当文厚合)	瓦当1/4	教吳寺 1 b
6-2	41	瓦	軒丸	2トレス	7箇	墨了板:不規則:中房:花井:單弁:垂定12介/B/ 蓋子數:不規則:中房:花井:單弁:垂定12介/B/ 井:中房:中房:外区:墨井:花弁:單弁:垂定12介/B/	素、灰白色、やや軽質	瓦当厚:1.7 (瓦当文厚合)	瓦当1/4	教吳寺 1 b
6-3	42	瓦	軒丸	2トレス	7箇	花弁:單弁:中房:花井:花弁:單弁:垂定12介/B/ 蓋子數:不規則:中房:花井:花弁:單弁:垂定12介/B/ 井:中房:中房:外区:墨井:花弁:單弁:垂定12介/B/	素、灰白色、やや軽質	瓦当厚:2.0 (瓦当文厚合)	瓦当小片	教吳寺 1 b
6-4	39	瓦	軒丸	2トレス	7箇	花弁:單弁:中房:花井:花弁:單弁:垂定12介/B/ 蓋子數:不規則:中房:花井:花弁:單弁:垂定12介/B/ 井:中房:中房:外区:墨井:花弁:單弁:垂定12介/B/	素、灰白色、やや軽質	瓦当厚:2.4 (瓦当文厚合)	瓦当1/4	教吳寺 1 b
6-5	50	瓦	軒丸	2トレス	7箇	花井:素、灰白色、堅質	素、灰白色、堅質	最大厚:1.3	瓦当小片	瓦当文厚合
6-6	77	瓦	軒丸	2トレス	石組	凸面:平行文タキシテ縁の胸日	素、灰白色、軽質	最大厚:1.6	瓦当小片	瓦当文厚合
7-1	20	瓦	鷲尾	2トレス	7箇	直線的な脛り付け空文:外版:平行文タキシテのちナテ うちナテ:内版:内版:向心円文タキシテのちナテ	素、灰白色、やや軽質	厚:2.3	小片	川除系鷲尾
7-2	19	瓦	鷲尾	2トレス	7箇	直線的な脛り付け空文:外版:内版:向心円文タキシテのちナテ	素、灰白色、やや軽質	厚:2.5	小片	川除系鷲尾
7-3	21	瓦	鷲尾	2トレス	4箇	直線的な脣り付け空文:外版:内版:向心円文タキシテのちナテ	素、灰白色、やや軽質	厚:1.6	小片	山陰系鷲尾
7-4	79	瓦	鷲尾?	2トレス	石組	凸面:平行文タキシテ:脣り:凹面:向心円文タキシテ	素、灰白色、やや軽質	最大厚:2.9	小片	
7-5	87	瓦	鷲尾?	2トレス	7箇	凸面:野口:凹面:貼土跡痕:布目	素、灰白色、軽質	最大厚:2.4	小片	
7-6	73	瓦	平	2トレス	石組	凸面:平行文タキシテのハケ目:繩縫:凹面:野 井:平	素、灰白色、やや軽質	最大厚:1.3	小片	繩縫

第5表 木橋

図面No.	実物No.	種類	構造	地区	部位・遺存	板文	形態の特徴	法量(cm)	備考
8-1	2	木製品	木製品	木製品	3トレス	5箇	「(待善)施々如律今N」	最大幅:2.2 施存長:19.7	呪符木製
8-2	1	木製品	木製品	木製品	3トレス	5箇	「(待善)施々如律X」	最大幅:2.6 施存長:19.0	呪符木製
8-3	3	木製品	木製品	木製品	3トレス	5箇	○	最大幅:2.1 施存長:12.1	呪符は複数 できまい

第6表 銅器

図面No.	実測No.	種類	器種	地区	層位・遺構	形態の特徴	法寸(cm)	重量	残存率	備考
3-4	186	鉄器	青銅か	2トレス	7層	長いU型針、中央が突出、出ベン状	最大幅:8.0 最大厚:1.6	128g	不明	容器の蓋あるいは器口
3-5	187	鉄器	長物鐵	2トレス	石組	断面形状の複数、途中から先端にかけて回転:断大径:0.6 断小径:0.4 長:19.0 +2回転ねじる	15.5g	<	輪骨部を欠く	

第7表 石製品

図面No.	実測No.	種類	器種	地区	層位・遺構	形態の特徴	法寸(cm)	重量	残存率	石材
3-6	148	石製品	複合石器	—	堀げ土	側面を直石、下面を斜め石に使用。それを側面をもつ、下面はたたき石にも使用したか。	最大幅:5.4 最大厚:1.2 残存長:12.5	782g	1/2程度	泥岩か (明灰色)
3-7	149	石製品	打斧	3トレス	8-9層	厚みのある石材、断面凸レンズ状、両側縁の刃部は平行、上端には平面の平切面、尖る刃部	最大幅:2.6 最大厚:1.2 残存長:9.2	200g	1/2未溝	頁岩か (明灰色)
3-8	120	石製品	砥石	2トレス	石組	側面3面、側面断面が方形一張欠)、米字形断面とぞく。側面は使用頻度が高く、刃部は状を呈す、大きさを欠く。	最大幅:2.8 最大厚:1.2 残存高:4.0	60g	1/2未溝	泥岩か (乳白色)
3-9	168	石製品	砥石	3トレス	7層	厚みのある板状の石材、使用面6面、断面は板状とともに厚みが方形	最大幅:2.2 最大厚:5.0 残存長:7.6	125g	1/2以上	砂岩の一塊 (暗灰褐色)

第8表 鉄製品

図面No.	実測No.	種類	器種	地区	層位・遺構	鉄住(鍔)	法寸(cm)	直径(鍔)	内径(鍔)	鍔厚(最大)	量目(g)
3-10	146	鉄貨	軍火測定	—	堀げ土	25.1	24.9	20.1	20.1	1.25	3.9
3-11	147	鉄貨	軍火測定	—	堀げ土	25.1	25.02	1.98	1.99	1.2	3.9

第9表 須恵器

図面No.	実測No.	種類	器種	地区	層位・遺構	形態・文様の特徴	調整	法寸(cm)	残存率 (復元標 部位)	備考
4-1	129	須恵器	片蓋	3トレス	8層	天井部:前面・側面つまみ:強く外傾 外側:圓板へラ削り/前面:刃先	外側:圓板へラ削り/前面:刃先	つまみ径:4.6 (/2未溝)	つまみ径:4.6 (/2未溝)	
4-2	165	須恵器	坏壊	3トレス	7層	天井部:前面・側面つまみ:強部に面をもつ 外側:圓板へラ削り/前面:刃先	外側:圓板へラ削り/前面:刃先	つまみ径:5.4 (/2未溝)	つまみ径:5.4 (/2未溝)	
4-3	160	須恵器	片蓋	3トレス	7層	天井部:前面・側面つまみ:強部に接をもつ 外側:圓板へラ削り/前面:刃先	外側:圓板へラ削り/前面:刃先	つまみ径:4.4 (/2以上)	つまみ径:4.4 (/2以上)	
4-4	17	須恵器	片蓋	2トレス	7層	天井部:前面・側面つまみ:強部に接をもつ 外側:圓板へラ削り/前面:刃先	外側:圓板へラ削り/前面:刃先	強大径:10.7 (/2以上)	強大径:10.7 (/2以上)	

図面 No.	実測 No.	種類	器種	地区	層位・遺構	形態・文様の特徴	調査	法量(cm)	残存率	測定部位	備考
4-5	166	須恵器	壺蓋	3トレ	7層	大井部:曲面/大井部と体部の境に横、工具によるガードで傷をかする	外面部:回転ナメ	-	小片	-	-
4-6	16	須恵器	壺蓋	3トレ	7層	大井部:曲面/口縁部:湯船の丸いかかりが天井部と直線につく/底深つまみ:平面な直底部	外前:自然で堅然とせり/外面:回転ナメ/不完全方向ナメ	最大径:14.0 厚さ:2.0 基盤高:1.5	(口径1/2未満)	-	-
4-7	159	須恵器	壺蓋	3トレ	7層	天井部:曲面/直底つまみ:久世	外面部:回転ナメ/直底つまみ:直底	-	小片	大井部外面にヘラ記号	-
4-8	107	須恵器	壺蓋	2トレ	7層	天井部:曲面/直底つまみ:直底	外面部:直底/回転ナメ(底をもつ張り凹凸)	-	小片	内面に墨またはスズ付着	-
4-9	135	須恵器	壺蓋	3トレ	5匣	口縁部:湯船の丸いかかりが内傾してつく	内面部:回転ナメ	-	小片	-	-
4-10	128	須恵器	壺蓋	1トレ	6匣	口縁部:下方に折り曲げて接地、外前に凹面	外面部:直底ナメ	-	小片	-	-
4-11	162	須恵器	壺蓋	3トレ	7層	口縁部:下方に折り曲げて接地、外面前に凹面	外面部:直底/回転ナメ	-	小片	-	-
4-12	164	須恵器	壺蓋	3トレ	7層	口縁部:下方に折り曲げて接地	内面部:回転ナメ	-	小片	-	-
4-13	163	須恵器	壺蓋	3トレ	7層	口縁部:下方に折り曲げて接地	外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ	-	小片	-	-
4-14	15	須恵器	壺身	3トレ	7匣	高台:中央よりにつくハの字にひらく/底部:平面部/体部:底と境をもたないやや緩な輪郭	高台内面:切妻ナメと指ナメ/エで切り離し調整不明/外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ/底	口径:12.3 高台径:7.2 基盤高:4.5	1/2以上	-	-
4-15	11	須恵器	壺身	3トレ	7匣	高台:外周沿ににつくハの字にひらく/底部:平面部/体部:直線的に外傾	高台内面:切妻ナメと指ナメ/エで切り離し調整不明/外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ/底	高台径:8.7 (高台径残1/2以上)	-	-	-
4-16	18	須恵器	壺身	3トレ	7匣	高台:中央よりにつくハの字にひらく/底部:直線的/外傾	高台内面:切妻ナメ/外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ	高台径:8.7 (高台径残1/2未満)	-	-	-
4-17	10	須恵器	壺身	2トレ	4匣	高台:中央よりにつく直立/底部:内湾	高台内面:切妻ナメ/外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ	高台径:8.0 (高台径残1/2以上)	-	-	-
4-18	136	須恵器	壺身	3トレ	5匣	高台:中央よりにつくハの字にひらく/底部:内湾	高台内面:切妻ナメ/外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ	高台径:7.6 (高台径残1/2)	-	-	-
4-19	156	須恵器	壺身	3トレ	7匣	高台:中央よりにつく/底部:半円/体部:内湾	高台内面:切妻ナメ/外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ/不完全方向ナメ	底径:10.4 2.6未満	(底径残1/2未満)	-	-
4-20	154	須恵器	壺身	3トレ	7匣	高台:中央より上がり直線的に外傾/口縁部:直線部と底をもたない半円な輪郭	高台内面:切妻ナメ/外面部:回転ナメ/内面部:回転ナメ/不完全方向ナメ	口径:14.8 (高台径)2 未満	(高台径)2 未満	-	-

両面No.	光測No.	種類	器種	地区	脣位・道掛	形態・文様の特徴	調査	法量(cm)	残存率(元標識部位)	備考	
4 - 21	153	須恵器	壺身	3トレ	7帯	高台;中央よりにつくハの字にひらく/底部:平向か;体部:内済	高台前面:回転ナダでナデ 外側:内面:回転ナダ/内面: 回転ナダ、不規方向ナダ	—	小片		
4 - 22	157	須恵器	壺身	3トレ	7帯	高台;外切沿いにつくハの字にひらく/底部:平向か;体部:内済	高台前面:切り/内外面:回転 ナダ	—	小片		
4 - 23	132	須恵器	壺身	3トレ	8-9帯	高台;背面:平面;体部:直線的に外傾	内外面:回転ナダ	—	小片		
4 - 24	152	須恵器	壺身	3トレ	7帯	体部:内済;輪部:輪部・卡槽状	内外面:回転ナダ	—	小片		
4 - 25	155	須恵器	壺身	3トレ	5帯	口縁部:端部外縁に段を有する	内外面:回転ナダ	—	小片		
4 - 26	158	須恵器	壺身	3トレ	7帯	口縁部:体部と段をもつたない直線な溝部	内外面:回転ナダ	—	小片	切れ目が透孔に斜位の繊 割(ヘラ記号状)	
4 - 27	151	須恵器	高杯	4トレ	7帯	脚部:輪部に異形の透孔(不整二角形)+切れ 目状)、輪部下方に突出して張地、外様に面をもつ	内外面:回転ナダ	脚部径:10.0 1/2以上	—		
4 - 28	5	須恵器	高杯	3トレ	7帯	脚部:2箇所に異形の透孔(不整二角形)+切れ 目状)	内外面:回転ナダ	脚部径:4.8 (脚部径残 全)	—		
4 - 29	150	須恵器	高杯	3トレ	7帯	脚部:輪部に切れ目状透孔	内外面:回転ナダ	脚部径:6.2 1/2未満	赤焼け		
5 - 1	12	須恵器	丸环	3トレ	7帯	高台;外切沿いにつくハの字にひらく/底部:直線的に外傾 高台:外側に立ち上がる肩に縫をもつたない直線部:底 部:短く外傾する。端部に面・段をもつたない	底面:内軸系を刻むのちナデ 消し/内外面:回転ナダ/底 部内面に栓・柱を刻める 底大径:19.0	口径:8.8 器高:14.0 高台径:12.5 底大径:19.0	1/2以上		
5 - 2	188	須恵器	長颈壺	3トレ	7帯	頸部:直線的に外傾	内外面:回転ナダ	脚部径:5.0 (脚部径残 全)	—		
5 - 3	126	須恵器	壺	2トレ	6帯	颈部:外反・口縁部:外輪に面をもつて、輪部をもつ て、また上方に突け出する	内外面:回転ナダ	—	小片		
5 - 4	102	須恵器	長颈壺	2トレ	石瓶	頸部:直線的に外傾	内外面:回転ナダ	—	小片		
5 - 5	182	須恵器	壺	3トレ	6帯	体部:直立・せん刷・肩部:横をもつたない	内外面:回転ナダ	脚大径:8.4 1/2未満	—		
5 - 6	184	須恵器	壺	3トレ	7帯	頸部:外反	内外面:回転ナダ	要脚径:4.4 1/2未満	外曲爪状スタンプ模		
5 - 7	169	須恵器	短頸壺	3トレ	7帯	肩部:大きくなり出し・縫をもつ	内外面:回転ナダ	—	小片		
5 - 8	185	須恵器	ハソウ	3トレ	5帯	口縁部:くびれた輪部から圓半状に広がる	内外面:回転ナダ	—	小片		
5 - 9	183	須恵器	壺	3トレ	6帯	底部から内済して立ち上がる	底面:回転ナダ前り/外側: ド・回転ヘア前り/内面:回 転ナダ	底径:4.0 (底径残 1/2未満)	高台基部径:	(高台基部 8.6 1/2未満)	
5 - 10	13	須恵器	裏または 壺	3トレ	7帯	高台:中央よりにつくハの字にひらく/底部: 底出	高台前面:回転ナダ/内面: 前・回転ナダ	高台径:11.2 (高台径残 1/2以上)	—		
5 - 11	8	須恵器	裏または 壺	3トレ	7帯	高台:中央よりにつくハの字にひらく/底部: 底出	袖台内面:平行文タスキ ち回転ナダ/外側:平行 文タスキ(内面:同心円文タ スキ、回転ナダ)	—			

画面 No.	米測 No.	種類	器種	地区	層位・遺構	形態・文様の特徴	層位	法量(cm)	株在地 (魚心根発現部)	備考
6-1	103	須世器	壺	2トレス	石縁	口縁部:外縁に帯状の面をもつ、縫部に面、波状文	内外面:回転ナデ	—	小片	
6-2	105	須世器	壺	2トレス	7号	縫部:直線的に外傾	断部:外縁:回転ナデ/体部:外縁:平行文タタキ 内縁:平行文タタキ	小片		
6-3	190	須世器	壺	3トレス	7号	底部:高台なし/体部:下半部に別個体成形が窺い、外縁に浅い、空沈痕	底部:体部外:平行文タタキ 内縁:平行文タタキ、回転ナデ/口縁部内面:回転ナデ	口径:18.6 脚高:約12.1 最大直径:約12.2 /以上	図面1上で合成復元	

第10表 土師器

画面 No.	米測 No.	種類	器種	地区	層位・遺構	形態・文様の特徴	層位	法量(cm)	株在地 (魚心根発現部)	備考
7-1	96	土師器	壺	2トレス	7号	複合口縁:断面二角形の縫が斜め下に突出する、漸部に面をもない、縫部に面をもつ	断部:断面二角形の縫が斜め下に突出する、漸部に面をもつ、縫部を人量に突出する、縫部に面をもつ	1mm程度の砂粒を大面上に含む	—	小片
7-2	172	土師器	壺	3トレス	7号	複合口縁:断面三角形の縫が水平方向に突出する、縫部に面をもつ	断部:断面三角形の縫が水平方向に突出する、縫部を人量に突出する	細砂を人量に含む	—	小片
7-3	141	土師器	壺	3トレス	8号	複合口縁:断面三角形の縫が水平方向に突出する	断部:断面三角形の縫が水平方向に突出する	細砂を大面上に含む	—	小片
7-4	173	土師器	壺	3トレス	5号	複合口縁:断面三角形の縫が斜め下に突出する	断部:断面三角形の縫が斜め下に突出する	1mm程度の砂粒を大面上に含む	—	小片
7-5	177	赤4.十器	壺	3トレス	7号	口縁部:外縁に帶状の面をもつ、凹縁文	口縁部:外縁に帶状の面をもつ、凹縁文	1mm程度の砂粒を多く含む	—	小片
7-6	174	土師器	壺	3トレス	7号	縫部:羽状文、...条文:背部:斜化の列点文	縫部:羽状文、...条文:背部:斜化の列点文	細砂を人量に含む	—	小片
7-7	175	土師器	壺	3トレス	7号	縫部:外縁:羽状文、一条文縫部:内縫部:縫部に面をもつ、外縁に面をもつ、縫部に面をもつ	縫部:外縁:羽状文、一条文縫部:内縫部:縫部に面をもつ、縫部に面をもつ	細砂を大面上に含む	—	小片
7-8	133	土師器	壺	3トレス	5号	口縁部:縫部に面をもつ、外縁に面をもつ、縫部に面をもつ	口縁部:縫部に面をもつ、外縁に面をもつ、縫部に面をもつ	1mm程度の砂粒を少量含む	—	小片
7-9	176	土師器	壺	3トレス	7号	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、口縫部>本縫部>大縫部	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、口縫部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、口縫部>本縫部>大縫部	1mm程度の砂粒を多く含む	—	小片
7-10	170	土師器	壺	3トレス	7号	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、	1mm程度の砂粒を大面上に含む	—	小片
7-11	142	土師器	壺	3トレス	8号	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、	1mm程度の砂粒を大面上に含む	—	小片
7-12	123	土師器	瓶?	2トレス	6号から	4箇所に円孔	片面に布目	細砂を含む	—	小片
7-13	137	土師器	壺	3トレス	5号	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、	口縁部:外縁:外反、縫部に面、縫部に面をもたない、	1mm程度の砂粒を大面上に含む	—	小片

図面No.	穴開No.	種類	器種	地区	部位・遺構	形態・文様の特徴	調査		跡十	法 [■] (cm)	発存率(復元痕跡部位)	備考
							測定	跡十一				
7-14	138	土師器	壺	3トレ	5層	口縁部:外反、薄側に前・後をもたない	磨耗著しく判然とせず	1mm程度の砂粒	—	小片		
7-15	171	土師器	壺	3トレ	7層	口縁部:外反	口縁部外側:鏡ナデ/口縁部内側:擦耗の割り	1mm程度の砂粒	—	小片		
7-16	121	土師器	壺	2トレ	4層	平坦な底部	体外部:鏡面のクシ貝印/底内側:鏡面のクシ貝印	1mm程度の砂粒	—	小片		
7-17	143	土師器	壺	3トレ	8-9層	平坦な底部から外傾して立ち上がる	磨耗著しく判然とせず	1mm程度の砂粒	—	小片		
7-18	134	土師器	高杯	3トレ	5層	脚部裏面:耳部側から船上光燒/脚端部に面・脚部側をもたない	脚部外側:鏡ナデ/1cmの斜位ハケ付/脚部内側:絞り口前り/ナデ	1mm程度の砂粒	標注7.8 (脚部歪焼全)			
7-19	117	土師器	瓶	2トレ	7層	上方に突出する把手	磨耗著をもたらす	1mm程度の砂粒	—	1/2未満		
8-1	101	土師器	皿	2トレ	4層	高台:/:の字にひらく	磨耗著しく判然とせず	水縫粘土	—	小片	内面に記号?	
8-2	110	土師器	皿	2トレ	7層	高台:/:の字にひらく	内外面:直板ナデ	水縫粘土	底径5.4 (底歪焼1/2未満)			
8-3	112	土師器	皿	2トレ	7層	高台:/:の字にひらく	内外面:回転ナデ	水縫粘土	底径4.9 (底歪焼1/2以上)			
8-4	113	土師器	皿	2トレ	7層	高台:/:の字にひらく	内外面:回転ナデ	水縫粘土	—	小片	(底歪焼1/2未満)	
8-5	144	土師器	皿	1トレ	6層	高台:断面三角形、/:の字にひらく	底面:無切り	水縫粘土	高台径6.8 上	高台歪焼1/2以上		
8-6	96	土師器	皿	2トレ	3層	高台:/:の字にひらく	磨耗著しく判然とせず	水縫粘土	底径6.4 下	底歪焼1/2未満		
8-7	99	土師器	皿	2トレ	5層	高台:非常に幅広で重厚なつくり	磨耗著しく判然とせず	水縫粘土	底径12.0 下	底歪焼1/2未満		
8-8	179	土師器	皿	3トレ	8層	高台:欠損	内外折:削除ナデ	水縫粘土	底径7.2 上	底歪焼1/2以上		
8-9	140	土師器	丹波皿	3トレ	8層	口縁端部に面・後をもたない/内外面丹波り	磨耗著しく判然とせず	水縫粘土	—	小片		
8-10	139	土師器	丹波皿	3トレ	8層	高台付・外部外側に内巻き	内外折:削除ナデ	水縫粘土	—	小片		
8-11	124	土師器	丹波皿	2トレ	6層	底面から屈く立ち上がり、横方凹にひちがる、内面浮突	内外折:削除ナデ	水縫粘土	底径6.2 (底歪焼1/2未満)			
8-12	114	土師器	皿	2トレ	7層	内面中央に凹面	内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒	底径5.2 (底歪焼1/2以上)			
8-13	34	土師器	皿	2トレ	7層	—	底面:回転糸切り/内面:回転ナデ	水縫粘土	底径3.0 (底歪焼全)			

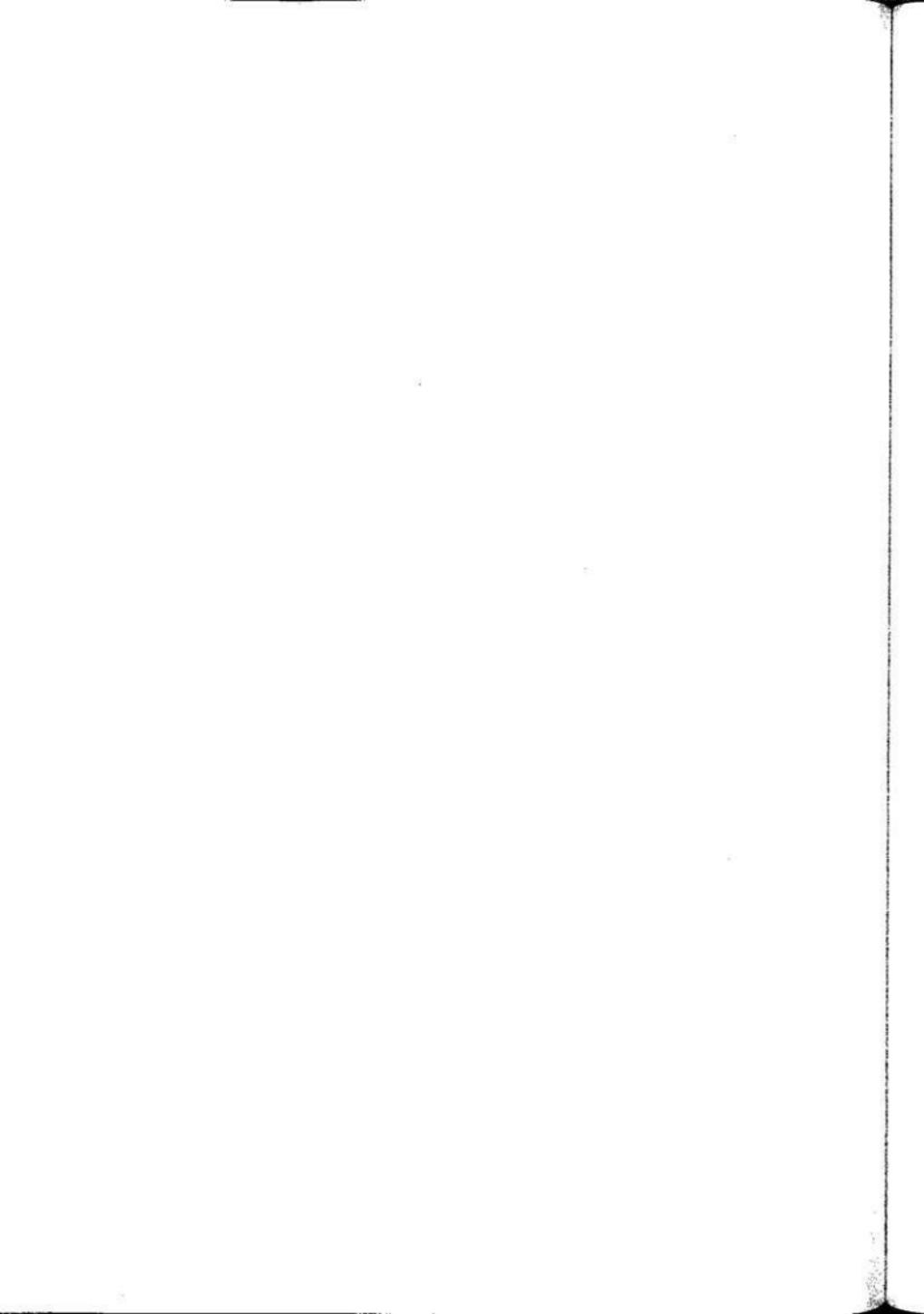
図面No.	実測No.	種類	器種	地区	管位・連番	形態・文様の特徴	調整	粘土	注意(cm)	残存率(復元困難部)	備考
8-14	28	土師器	皿	3トレ	4号	底面から外側して立ち上がる 底面から外側して立ち上がる	擦耗著しく判然とせず	水縞粘土	底径5.4 (底径1.2以上)		
8-15	36	上部器	皿	2トレ	7号	底面から外側して立ち上がる	水縞粘土	底径5.6 (底径1.2未満)			
8-16	6	土師器	皿	2トレ	6号	底面から外側して立ち上がる/内面見込みに ロクロ口	水縞粘土	底径6.4 (底径1.2以上)			
8-17	38	上部器	皿	2トレ	4号	底面から内湯気味に外極する	底面・回転糸切り	—	小片		
8-18	111	土師器	皿	2トレ	7号	底面から外側して立ち上がる	底面・回転糸切り/内外面: 回転ナブ	水縞粘土	底径7.9 (底径1.2未満)		
8-19	4	土師器	皿	1トレ	6号	底面から短く立ち上がり、輪方向にひろがる	底面・回転糸切り	水縞粘土	底径6.2 (底径1.2未満)		
8-20	25	土師器	皿	2トレ	7号	底面から短く立ち上がり、輪方向にひろがる	底面・回転糸切り	水縞粘土	底径6.8 (底径1.2未満)		
8-21	27	上部器	皿	2トレ	7号	底面から外側して立ち上がる/内面見込みに ロクロ口/「標準形」に面	底面・回転糸切り/内外面: 回転ナブ/「標準形」	水縞粘土	底径6.0 (底径1.2未満)	1/2以上	
8-22	104	土師器	皿	2トレ	6号	底面から短く立ち上がり、輪方向にひろがる	底面・回転糸切り	水縞粘土	底径6.8 (底径1.2未満)		
8-23	180	上部器	皿	2トレ	7号	分厚く重疊感あり	底面・回転糸切り	水縞粘土	—	小片	
8-24	32	土師器	皿	2トレ	石縫	底面から外側して立ち上がる	底面・回転糸切り	水縞粘土	底径5.4 (底径1.2未満)		
8-25	100	上部器	杯	2トレ	石縫	底面から短く立ち上げる/外傾する	底面・回転糸切り	水縞粘土	底径6.4 (底径1.2未満)		
8-26	35	土師器	皿	2トレ	4号	底面から短く立ち上がり、輪方向にひろがる	擦耗著しく判然とせず	水縞粘土	底径6.0 (底径1.2未満)		
8-27	33	土師器	杯	2トレ	7号	高台端部外縁に面をもつ	底面・回転糸切り	擦耗著しく判然とせず	水縞粘土	底径4.5 1/2未満	
8-28	115	土師器	杯	2トレ	7号	高台前:太く短い	水縞粘土	底径4.2 1/2未満			
8-29	122	土師器	杯	2トレ	4号	中央に円孔	片面に回転糸切り痕	水縞粘土?	最大径4.4 1/2以上		

第11表 陶磁器

図面No.	実測No.	種類	器種	地区	部位・遺構	形態・文様の特徴	胎色調	胎土	法量(cm)	残存率	備考
9-1	108	し器系	壺	トトロ	7号	口縁部:くびれた腹部から人さく構造にして上方にのげる。腹部に面を反し、強く屈曲して上方にのげる。底部に面をもつ 高台:頸りだしか、墨付および内面露窓(他全 周縁部)	内外面:淡緑灰色 金面:灰	暗緑、暗赤褐色 —	—	小片	
9-2	9	社器	壺	トトロ	7号	高台:頸りだしか、墨付および内面露窓(他全 周縁部)	内外面:淡緑灰色 金面:灰	暗緑、薄灰色 —	5.23	(高台)残存会 —15世 紀	
9-3	31	陶器	壺	トトロ	3号	高台:頸りだしか/全面施釉 高台:頸りだし/外側:上半施釉、下半:泥の刷 り下部:内面:全面施釉、残存露窓所:砂目 様模様	内外面:黃灰色 金面:灰	白色(1cm大) 白色(多く含む)	5.5	(高台)残存会 —17世 紀初	
9-4	29	陶器	壺	トトロ	3号	高台:頸りだし/外側:上半施釉、下半:泥の刷 り下部:内面:全面施釉、残存露窓所:砂目 様模様	内外面:黃灰色 金面:灰	白色(多く含む)	4.0	小片	
9-5	7	陶器	扁形火鉢	トトロ	4号	クロコ型模様 高台:高脚、張り付けか/全面施釉 高台:高脚、張り付けか/全面施釉、朱(青花?)	外面:褐色 内面:褐色	褐色、白色 —	20.0	(高台)残存会 —19世 紀	
9-6	30	社器	壺	トトロ	4号	高脚、内面:全面施釉、朱(青花?)	内外面:灰白色 朱付け、暗赤灰色	黑色 —	6.4	(高台)残存会 —19世 紀	

第12表 土製品

図面No.	実測No.	種類	器種	地区	部位・遺構	形態の特徴	調整	法量(cm)	残存率/反転復 元(指標部位)	備考
13-30	119	土製品	土製支撑	トトロ	石組	頭部に非 鳥泡孔	ナデー 小片	1mm程度の砂粒を大量に含む —		





6-1



6-2



6-3



6-4



6-5



6-6

瓦（軒丸）



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5



7-6

瓦（鶴尾・平瓦）



同上 裏面



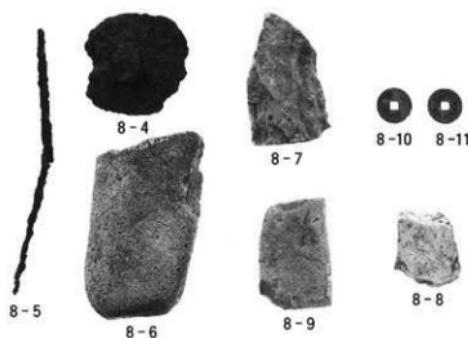
7-6

線刻瓦

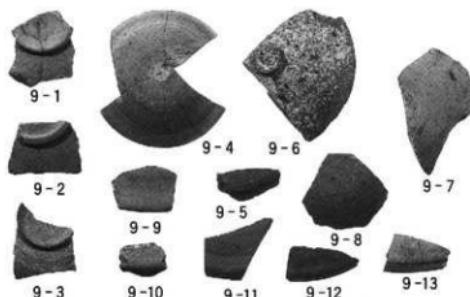


8-2

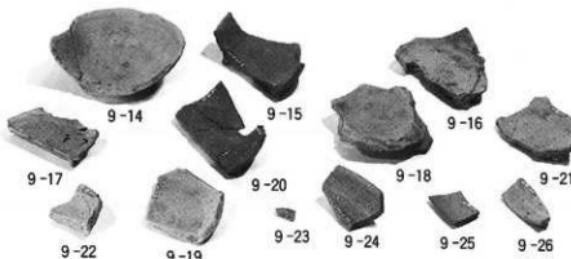
木簡



鉄器・石器・錢貨



須恵器 壺蓋



須恵器 壺身



9-8
ヘラ記号



9-10
内面
墨痕



9-27



同左

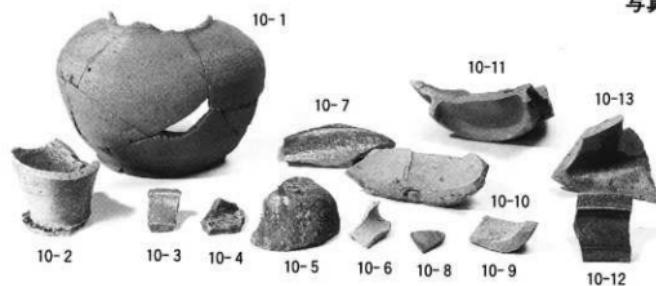


9-28

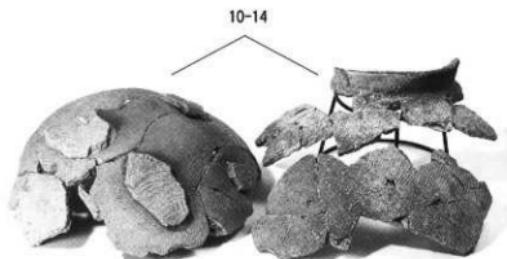


9-29

須恵器 高坏



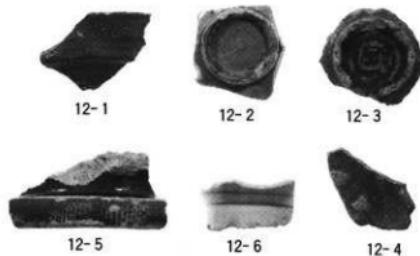
須恵器 壺・甌類



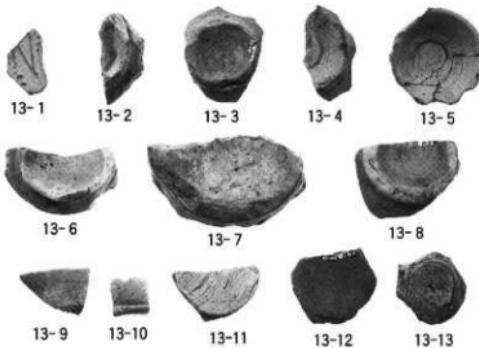
須恵器 甌



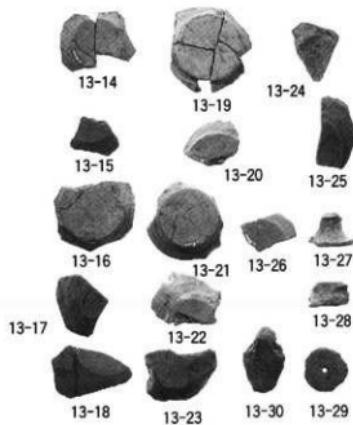
土師器



陶磁器



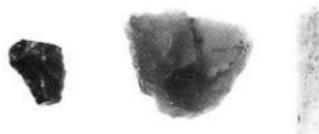
土師質土器



土師質土器



陶磁器（図面なし）



石未製品（図面なし）



鉄滓（図面なし）



桃の種（図面なし）



報告書抄録

ふりがな	おのいせき							
書名	小野遺跡							
副書名	県道木次直江停車場線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	斐川町文化財調査報告							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	江角健・露梨靖子・渡邊正巳							
発行機関	斐川町教育委員会							
所在地	〒699-0592 島根県簸川郡斐川町大字莊原町2172番地 Tel.0853-73-9190							
発行年月日	平成17(2005)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小野遺跡	島根県簸川郡斐川町大字 神水1196-3番地 ほか	32401	Y191	35度 21分 43秒	132度 48分 56秒	平成14年度 2002年1月9日 ～3月26日	32m ²	道路改良工事 に伴う 発掘調査
平成15年度 2002年4月3日 ～6月17日								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物			特記事項	
小野遺跡		古代～中世	水田(畦畔) 石列	瓦(鶴尾・軒丸・丸・平) 呪符木簡 弥生土器 須恵器 上歸器 陶磁器				

斐川町文化財調査報告書 第31集

県道本次直江停車場線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

小野遺跡

2005年3月31日発行

編集・発行 斐川町教育委員会

〒699-0592

鳥取県斐川郡斐川町大字莊原町2172

TEL.0853-73-9190

印刷・製本 株式会社 報光社